蜀酒濃無敵。江魚美可求。　蜀酒、濃にして敵無し、江魚、美にして求む可し。
終思一酩(八)酊。淨(九)掃雁(一〇)池頭。　終に思ふ一たび酩酊せむことを、淨く掃はむ雁池の頭。

【字解】【一】策杖　策はつゑ、杖は之をつくこと、通常「杖策」といひて策杖とはいはず、或は誤りて顚倒せるか、此句自己をいふ。【二】王門　漢中王の邸の門。【三】異昔遊　昔年王の門にあそびしときとは樣子がちがふ、今は王は賓客を宴せざるなり。【四】已知　知るは作者が知るなり。【五】嗟不起　王がかくするなり、嗟はなげく、不起とは酒にあてられてたちあがれぬをいふ。【六】未許　許とは王がゆるすなり。【七】醉相留　客をひきとめてよはせる。【八】酩酊　ひどくゑふこと。【九】淨掃　さつぱりと掃除する。【一〇】雁池　王の邸内の池をいふ。漢代、梁の孝王兎園を築く、うちに雁池あり、末の二句は「終に思ふ、淨く雁池の頭を掃うて一たび酩酊せんことを」の意。

【詩意】自分は杖をついて時としてでかけるにはでかけるが、王の門はむかしとは樣子がちがふ。あなたはためいきついて起きられぬと仰せられて、まだ人をひきとめて醉はせようとはなされませぬ。蜀の酒の味のこまやかなことは他に敵するものがないし、涪江の魚のうまいやつはぢきに求められまするぞ。わたくしはどうあつてもお邸の池のほとりをさつぱり掃除してくださつてそこでいつぺん十分醉ひたいものだとおもうてをりまする。

〔三〕

羣(一)盜無(二)歸路。衰(三)顏會(四)遠方。　羣盜に歸路無し、衰顏に遠方に會す。
尙(五)憐(六)詩警(七)策。猶記酒顚(八)狂。　尙憐む詩の警策、猶記す酒の顚狂。
魯(九)衞彌尊(一〇)重。徐(一一)陳略喪亡。　魯衞彌尊重、徐陳略喪亡す。
空餘枚(一二)叟在。應(一三)念早(一四)升堂。　空しく枚叟を餘して在り、應に念ふべし「早く堂に升りし」ことを。

【字解】【一】羣盜　羣盜のはびこるときにあたつての意、羣盜とは蜀に徐知道あり、兩京には黨項羌あり、東都には史朝義あるの類をいふ。【二】無歸路　自分の故鄕へかへるべき道路がない。【三】衰顏　かほつきが老衰したときにあたつての意。【四】會遠方　王と遠方に於てであうたこと、遠方とはこの梓州の地をさす。【五】憐、記　ともに王がなすなり、憐は愛すること、記は記憶すること。【六】詩、酒　ともに作者自己のこと。【七】警策　馬にくれるいましめのむち、詩文の一篇のなかに短いぴりつとこたへる樣な文句あるをいふ。【八】顚狂　ゑうてくるひまはるさま。【九】魯衞　魯も衞も周代には天子の家と親戚のあひだがらなり、漢中王は皇族ゆゑかくいふ、また開元十四年十一月安宗が寧王の宅へ行幸して宴せしときの詩にも魯衞情尤重の句あり。【一〇】尊重　たふとくおもし。【一一】徐陳　魏の徐幹・陳琳、魏の文帝に愛せられし文學者なり、文帝が吳質に與へし書に、徐陳應劉、一時俱逝の語あり、ここは漢中王の賓客たりし他の多くの文學者をさす。【一二】枚叟　漢の枚乘、乘は梁の孝王の賓客として詞賦最も高かりし、今かりて自己に比す。【一三】念　王がおもふ。【一四】早升堂　かつて以前に王邸の堂にのぼり知遇を得しことをいふ。

【詩意】いま諸處で多くの盜賊があるのでわたくしは故鄕へかへる路がありませぬ。かかるときこの老衰した顏つきであなたとこんな遠方でおあひをしました。それにあなたはまだわたくしの詩に警策のあることを愛せられ、またわたくしが酒をのんでくるひまはるくせのあることをお忘れになりませぬ。あなたは皇室のおつづきあひでいよいよ尊貴の地位にあらせられるがかつて知遇を辱うした文

學者ども、徐・陳に比すべき人たちはあらかたなくなつてしまひました。いたづらに枚乘に比ぶべきわたくしだけがのこつてをりまする。どうかこのおやぢはずつと以前からお邸の堂にのぼつたものであるといふことをおかんがへくだされたい。

翫（一）月呈漢（二）中王

月を翫びて漢中王に呈す

夜深露氣清。江（三）月滿江城。　夜深くして露氣清し、江月、江城に滿つ。

浮（四）客轉危（五）坐。歸（六）舟應獨行。　浮客轉た危坐す、歸舟應に獨行すべし。

關山同（七）一照。烏鵲自多驚。　關山、同一に照らす、烏鵲自ら多く驚く。

欲得淮（八）王術。風吹暈（九）已生。　得むと欲す淮王の術、風吹きて暈已に生ず。

【字解】〔一〕翫月　月色のあかるきをめでしこと。〔二〕漢中王　前詩の王なり。〔三〕江　涪江。〔四〕浮客　飄泊する旅客、自己をさす。〔五〕危坐　脚をうしろへまげかされてすわること、けだしおちつかぬさま、おちつかぬに腕といふは矛盾せる如くなるもそこに月を惜むこころこもるなるべし。〔六〕歸舟　王に別れて自己の居所成都へかへるに舟にのるなるべし、（或は曰く王が蓬州へかへるなりと、しかし王ならば獨行は似合はしからざれば作者の舟をいふならん）。〔七〕同一照　照を或は點に作るはよろしからず。〔八〕淮王術　淮王とは漢の淮南王劉安をいふ、以て漢中王に比す、安が著はせる「淮南子」に畫二蘆灰一而月暈闕の語あり、蘆をもやした灰のうへに月の形をかき、その一部分をけせば天上の月のくもりもその部分がかける、といふなり。〔九〕暈　月暈なり、おつきさまのかさ、舟がゆくに風があつてはならぬゆゑ「かさ」をはらひのけたしといふなり。

【題義】月の光りをめでて漢中王にたてまつつた詩。これは月をもてあそぶといふも惜別の詩なり、惜別のあわただしきとき月の光りをめづるといふは王に對する戀著の情をこめしものかと察せらる。寶應元年梓州にての作。

【詩意】夜がふけて露の氣がきよくおき、江上の月がかはぞひの城いつぱいにさしこんでゐる。この月をながめながら旅行のことが氣になるから飄泊ものたる自分はたちひざのかたちでこの月をながめる。しかしつまりはただひとりで舟にのつてかへらねばならぬのである。この月の光りはすべての關山を同一に照らし、わたしをてらすひかりはすなはちあなたをてらしてゐる、ただ月前の烏鵲は多くみづから驚いておちつかぬ。いま舟のでかかつてゐるときに風が吹きだし月のおかさがでだした、これではならぬによつて、どうか淮南王の術でもつてこのおかさをはらひのけてしまひたいとおもふのである。

從（一）事行。贈嚴（二）二別駕

從事行、嚴二別駕に贈る

我行入東（三）川。　我行きて東川に入る、

【字解】〔一〕從事行　從事のことをうたへるうた、詩中に「本州從

十步一迴首。
十步に一たび首を迴らす。

(四)成都亂罷氣(五)蕭索。
成都、亂罷みて氣蕭索たり、

浣花草堂亦(六)何有。』
浣花の草堂亦何ぞ有らむ。』

(七)梓中(八)豪俊大者誰。
梓中の豪俊、大者は誰ぞ、

(九)本州從事知名久。
本州の從事名を知らるること久し。

把臂開樽飲我酒。
臂を把り樽を開き我に酒を飲ましむ、

酒酣擊(一〇)劍蛟(一一)龍吼。
酒酣に劍を擊てば蛟龍吼ゆ。

(一二)烏帽拂塵青(一三)騾粟。
烏帽には塵を拂ひ青騾には粟、

(一四)紫衣將(一五)炙緋衣走。(一六)』
紫衣は炙を將ひ緋衣は走る。』

(一七)銅盤燒(一八)蠟光(一九)吐日。
銅盤、蠟を燒き光り日を吐く、

(二〇)夜如何其初促(二一)膝。
夜如何其、初めて膝を促す。

(二二)黃昏始扣(二三)(二四)主人門。
黃昏始めて扣く主人の門、

(二五)誰謂(二六)俄頃膠(二七)在漆。
誰か謂はむ俄頃、膠、漆に在り。

萬事盡付(二八)形骸外。
萬事盡く付す形骸の外、

(二九)百年未見歡娛畢。
百年未だ見ず歡娛の畢るを。

(三〇)神傾意(三一)豁眞佳(三二)士。
神傾き意豁にして眞に佳士なり、

(三三)久客多憂今愈(三四)疾。』
久客憂多し、今疾を愈す。』

(三五)高視乾坤又可愁。
高く乾坤を視るに又愁ふ可し、

(三六)一體交(三七)態同悠(三八)悠。
一體交態同じく悠悠たり。

(三九)垂老遇君未恨(四〇)晚。
垂老君に遇ふ未だ晚きを恨みず、

(四一)似君須向古(四二)人求。』
君に似たるは須らく古人に向つて求むべし。』

事」の語あり。【二】嚴二別駕　梓州の別駕の官なる嚴某。【三】東川　梓州をいふ、梓州は東川節度使の治所なり。【四】成都亂罷　寶應元年七月に劍南兵馬使徐知道反す、八月知道は其の將李忠厚に殺さる、是に於て亂平ぐ。ここに亂罷むとあれば八月以後のことなり。【五】氣蕭索　氣象さびし。【六】亦何有　草堂も荒かれてあるまじとおもふなり。【七】梓中　梓州以內をいふ。【八】豪俊　すぐれた人物。【九】本州從事　本州とは梓州をいふ、從事とは屬官なり、州の長官は刺史、別駕はその下に屬す、即ち從事なり。【一〇】擊劍　劍舞をなすなり。【一一】蛟龍吼　劍の鳴る樣子。【一二】烏帽　拂塵　主人が客（作者）のゑぼうしのほこりを拂はせる。【一三】青騾粟　客の青騾には粟をあたへてたべさせる。（或は騾を蠡に作り青蠡粟とは帽子の紋樣なりとの解をなすものあれども今從はず）。【一四】紫衣、緋衣　主人の子弟の雜役を執るものをいふ。【一五】將炙　きやくの前にあぶり肉をもちだす。【一六】走　いろいろもてなしごとの爲めに奔走する。【一七】銅盤　あかがねの大きなばん、これは燭臺のこと。【一八】燒蠟　らふそくをもやす。【一九】光吐日　あきらかなさま。【二〇】夜如何其　「其」の字は助字、詩經に夜如何其、夜未央、とあり、これは夜なかごろをさしていへり。【二一】促膝　ひざとひざをつきあはせる、促とはさあお先きへといふて客を前へのりださせるをいふ。【二二】黃昏　たそがれどき。【二三】扣　叩と同じ。【二四】主人　嚴別駕。【二五】誰謂　意外にも、かくあり。【二六】俄頃　しばらくにして。【二七】膠在漆　にかは、うるし、共に物をくつつけあはせる用を爲す、二者を合すれば更によくくつつく、賓主交情の密に合するをいふ。【二八】付形骸外　事の重んずべきものは精神に在りて形骸に在らず、形骸の外に付すとは之を輕視して措いて問はざるをいふ。【二九】百年　生涯の時間。【三〇】神傾　その精神を我がかたへかたむける。【三一】意豁　こころひろくして能く我をいれる。【三二】佳士　よい人物。【三三】久客　ながながの旅客、自己をさす。【三四】

瘳疾　やまひがなほる。【三五】高觀乾坤　天地をみあげてみる。【三六】一體　世上一般をいふ。【三七】交態　人と人と交るさま。【三八】悠悠　悠悠とは悠悠行路の略言なるべし、悠悠行路とははるかなるみちのことなり、ただし人の人に於ける親切心なく路傍の人を見るがごとくなるをさして悠悠行路心といふ。【三九】垂老　年老いかかつて、老ゆるになんなんとして。【四〇】晩　おそし。【四一】似君　如君の意。【四二】古人　むかしの人、今世にはなきなり。

【題義】梓州で別駕の官嚴某にであうてその人物が氣にいりたるによりつくれるうた。寶應元年秋、梓州にての作。

【詩意】自分はあるいて東川（梓州）にはひつたが、十あしあるいては一たびふりむいて成都の方をながめた。成都も兵亂が終つて氣象ものさびしくなつたであらう、我が浣花の草堂もどうして存在してゐるとおもはれよう。』　さて梓州には豪俊もあるがその大なるものはだれかといふと、本州の從事たる嚴別駕その人が尤も久しく名を知られてゐる、この人が自分の臂をとり酒だるを開いて自分に酒を飮ませてくれ、酒の酣なるときには劍舞をなす、劍は蛟龍の吼ゆるごとくにうなる。それからわたしの帽子の塵をはらはせ、わたしの青騾にもみがらをたべさせてくれ、また子弟をもつかつて、その紫衣をきたものはあぶり肉をもちだす、緋の衣をきたものは色色の事のために奔走してくれる。』　銅盤の燭臺にはらふそくをもやして太陽のやうにあかるくし夜の刻限を問ふころにはじめて膝をのりださせていよいよ親密さを加へる。自分はたそがれどきにはじめて主人の門を叩いたにすぎぬのに意外にもしばしの時間ではやくもかく膠が漆のなかに在るほどの親密さである。萬事はすべて形骸の外にかろくうちすててかかる、生涯たつともこのたのしみがいつ終るかわからぬと思はるるほどである。主人はその精神をすべてわたしに向けて傾けてくれこころひろくわたしを容れてくれまことによい人物で、ながく旅にゐる自分もいつもは心配が多いのだが、いまは心配もなく病氣もなほつたかの感がある。』　ここに天地を見わたすと愁ふべきことがある、それはどこを見ても一樣に世間の交際のありさまが人に對して親切心がなく路傍の他人を見る樣な輕薄ぶりだといふことである。こんな際に老いかかつた今ではあるが自分が君にであふのはおそいと恨むるにはあたらぬ、君のごとき人は古人のうちに向つて之を求めねばならぬ、今の世のなかには見ることのできぬ人物である。』

贈韋贊善別（一）

（二）扶病送君發。自憐猶不（三）歸。
祗應（四）盡客淚。復作（五）掩荊扉。
（六）江漢（七）故人少。（八）音書從此稀。
（九）往還二十載。（一〇）歲晚（一一）寸心違。

韋贊善に贈りて別る

病を扶けて君が發するを送る、自ら憐む猶歸らざるを。
祗應に客淚を盡して、復荊扉を掩ふことを作すべし。
江漢、故人少し、音書此より稀ならむ。
往還、二十載、歲晚、寸心違ふ。

なりといへり、蓋し韋はかつて贊善の官にあり、今は南方へ流落してきてなりしものなるべし。【二】扶病　病氣のからだを他人から手だすけしてもらふこと。【三】不歸　故郷にかへらぬこと。【四】盡客淚　泣きあかして客中の淚をそゝぎつくす。【五】作掩荊扉　作の字はいらぬ樣なれども用あり、意味は之なきと同じことなり、掩は手でおさへてとざすこと、荊扉はいばらであんだとびら、掩扉は隱居してゐることをいふ。【六】江漢　漢水江水の流るる地、江漢の義をひろく用ひて自己の居處梓州のことに用ふ。【七】故人　ふるいしりあひの人。【八】音書　てがみ。【九】往還　韋と往來して交際せしこと。【一〇】歲晚　自己の晚年をいふ。【一一】寸心違　寸心とは方寸內のこころ、違ふとはこころが事實とあはぬをいふ、心では韋とともに居たいとおもふ、事實は韋と別れねばならぬ、これ心が事とたがふなり。

【字解】【一】韋贊善　贊善の官なる韋某、東宮の官に左贊善大夫五人あり、傳令・諷過失・贊禮儀を掌る、韋は韋見素の子孫

【題義】贊善大夫の官をつとめたことのある韋某に贈りて別れをのべた詩。寶應元年梓州にての作。

【詩意】自分は人だすけによつて病氣のからだを起して君の出發するのを送る、その自分はやつぱり故郷にまだ歸らぬ氣のどくな境遇にあるものである。つまりはただ客中の淚をそそぎつくしてまた自分のあばらやの扉をとざしてゐるよりほかはないのであらう。君が去れば江漢の地方（梓州）には自分の舊知もすくないし、君のたよりもこれから稀になるであらう。二十年間も君と交際してきたのが、この晚年になつて事が願ひとかなはぬのはまことにつらいことである。

寄(一)高適(二)

高適に寄す

楚(二)隔乾(三)坤遠(四)。難招(五)病(六)客魂。　楚隔りて乾坤遠し、招き難し病客の魂。

詩(七)名惟我(八)共。世事與誰論。　詩名惟我共にす、世事誰と論ぜむ。

北(九)闕更(一〇)新主。南(一一)星落(一二)故園。　北闕、新主更る、南星、故園に落つ。

定知相(一三)見日。爛(一四)漫倒芳樽。　定めて知る相見るの日、爛漫、芳樽を倒さむことを。

【字解】【一】寄高適　高適に寄せたる詩。此詩は宋の朝奉大夫員安宇が收むる所の集外詩にして其の作時詳ならず、從つて諸家の解釋一定せず、仇氏の說亦服しがたきものあり、余は鄙見によりとく。【二】楚　成都地方をさして楚といふ、戰國の時代蜀は楚の國に屬したれば之を楚といへり。【三】乾坤　天地、ひろく言ひなしたるなり。【四】遠　この遠の字と楚隔の隔の字は長安を主として成都の地をいへるならん。【五】招魂　魂を招くといふことは已に前に屢〻見ゆ、故郷（兩京）へ自己の魂をよびもどしがたしといふなり。【六】病客　病客とは作者自己をいふ。【七】詩名　高適の詩を善くすとの名聲。【八】我　作者。【九】北闕　長安城の北門。【一〇】更新主　肅宗崩ぜられ代宗之にかはりて卽位せられしをいふ。【一一】南星　南極老人星、以て高適に比す。【一二】落故園　故園とは成都浣花溪の草堂をさしていへり、この用法は作者の他詩にも故園猶得見殘春などとあり、高適が成都に赴任することを南星が故園に落つといへり。寶應元年四月十八日丁卯肅宗崩じ、二十八日己巳代宗卽位す、六月嚴武召されて朝廷にかへる（但し秋まで巴田でざりしこと已に前にみゆ）。高適蜀州刺史より嚴武に代りて西川節度使・成都尹となる。この作詩の時不明なれども適が成都尹となりしにつきいはひてやりしなり。【一三】相見　面會する。【一四】爛漫　醉ひどれのさま、芳樽花草の芳はしき時節のさかだる。

【題義】此詩余は作者成都にありて高適の新任について寄せしものかとかんがふ。寶應元年四五月頃成都にての作ならんか。

【詩意】むかし楚に屬せしこの蜀の地は都とはへだたつて天地茫茫として遠い、だからとてもこの病客の魂を都の方へよびもどすことなどはできぬ。君は詩名に於ては自分だけが之と共にしてをるが、自分は世間の事については君でなくて誰とともに之をかたりあはうか。このたび北方では新天子が御即位になり、此地では南極星といふべき君が我がこの第二の故郷に落ちてきた。きつとおたがひが面會する日に於てはゑひどれになつて酒樽をのみたふすことであらう。

野望（一）

金華山北（二）涪水西（三）（四）。　　金華山の北涪水の西、
（五）仲冬（六）風日始（七）淒淒。　　仲冬風日始めて淒淒たり。
山連（八）越嶲（九）蟠三蜀。　　山は越嶲に連なりて三蜀に蟠り、
水散（一〇）巴渝下（一一）五谿。　　水は巴渝に散じて五谿に下る。
（一二）獨鶴不知何事舞。　　獨鶴知らず何事あつてか舞ふ、
（一三）饑烏似欲向人啼。　　饑烏人に向つて啼かむと欲するに似たり。

【字解】【一】野望　野らのながめ。【二】金華山　四川省潼川府射洪縣北二里にあり。【三】北　北の字一に南に作る。【四】涪水西　涪水は涪江、府內を大體に於て北より東南に貫き流るる川なり、西といふは其地江の西にあるなり。【五】仲冬　十一月。【六】風日　風及び太陽の樣子。【七】淒淒　つめたきさま。【八】越嶲　四川西南外夷の地方。【九】三蜀　四川の地、秦漢以後に蜀郡・廣漢郡・犍爲郡を置く、之を三蜀といふ。【一〇】巴渝　巴州渝州、四川の東南部にあたる。【一一】五谿　雄溪・樠溪・力溪・潕溪・酉溪なり、貴州北部にあり、北流して長江に入る。【一二】獨鶴　暗に自己の客境に比す。【一三】饑烏　暗に自己の貧苦に比す。【一四】射洪　縣の名、潼川府三臺縣治（唐の梓州）の東南にあり。【一五】春酒　春になればできあがる酒、今は仲冬なれば酒としては未成品なり、しかるにそれをはやのみたしとの意をのぶるなり。【一六】寒仍綠　まだ仲冬で寒いのだがそれでも綠色にすんでゐるといふなり。【一七】目極　一に極目に作る、同義なり、どこまでもとほくながめること。【一八】傷神　こころをいたましめる。【一九】誰爲攜　「何人か我が爲めにその酒をたづさへ來らん」の意。

（一四）射洪春（一五）酒寒（一六）仍綠。　　射洪の春酒寒きも仍綠なり、
（一七）目極傷（一八）神誰（一九）爲攜。　　目極まりて神を傷ましむ誰か爲めに攜へむ。

【題義】射洪縣の野外にて眺望してよめる詩。寶應元年十一月、射洪縣にての作。

【詩意】金華山の北で涪江の西。ここは風も日も仲冬になつて始めてつめたくおぼゆる。みれば山脈は越嶲の方へつらなつて蜀地全體にわだかまり、水流は巴州渝州の地方へ散らばつてさらに五溪の方へくだる。一匹の鶴が舞ひつつあるがそれはいかなる事があるためなのか。また饑ゑた烏がゐるがそれは人に向つて啼いて窮狀を訴へんとするかの樣子がある。（自分とよく似てゐる。）射洪でつくりこむ春酒は今からはや綠色をして飲めさうだが、この極目傷神のをりから、だれか自分のためにそれをもつてきてのませてくれるものはないか。

冬到金華山觀因得故拾遺陳公學堂遺跡

冬金華山の觀に到り因つて故の拾遺陳公の學堂の遺跡を得たり

涪右衆山內。金華紫崔嵬。　涪右、衆山の內、金華紫にして崔嵬たり。

上有蔚藍天。垂光抱瓊臺。　上に蔚藍の天有り、光りを垂れて瓊臺を抱く。』

繫舟接絶壑。杖策窮縈回。　舟を繫ぎて絶壑に接す、策を杖いて縈回せるを窮む。

四顧俯層巓。淡然川谷開。　四顧、層巓より俯す、淡然、川谷開く。

雪嶺日色死。霜鴻有餘哀。　雪嶺、日色死す、霜鴻、餘哀有り。

焚香玉女跪。霧裏仙人來。』　香を焚きて玉女跪き、霧裏、仙人來る。』

陳公讀書堂。石柱仄青苔。　陳公の讀書堂、石柱、青苔に仄く。

悲風爲我起。激烈傷雄才。』　悲風我がために起る、激烈、雄才を傷む。』

【字解】【一】觀　道士の居る寺。【二】故拾遺陳公　已に前にみゆ、陳公は陳子昂。【三】學堂　詩中に讀書堂とあれば勉學せしいへなり。【四】涪右　涪江の右、右とは西をいふ。【五】紫　山の色。【六】崔嵬　石戴く土の貌。【七】蔚藍天　こきあゐいろのそら。【八】垂光　天から垂光をたれて。【九】瓊臺　瓊は赤き玉、この觀をさしていへり。【一〇】接　接近するをいふ。【一一】絶壑　きつたてのたに、或は壑を壁につくる、壁は「がけ」をいふ。【一二】杖策　策をつゑつくこと。【一三】縈回　溪流のめぐりたるところ。【一四】俯層巓　山のかさなれるいただきから下をみおろす。【一五】淡然　色のあはきさま。【一六】雪嶺　雪山。【一七】死　光りなきさま。【一八】玉女　香をたきにくる參詣の女。【一九】跪、來　この二字は互文にて男女たがひに共用せしむるなり、どちらも來りて跪くなり。【二〇】霧　香煙をいふ。【二一】仙人　道を訪ふ男子をいふ。【二二】仄　かたむく。【二三】激烈　感激すること。【二四】雄才　大力量ある文才。

【題義】冬、金華山の道觀にいつたところが、もとの拾遺陳公の勉學した堂の遺跡をみつけた。寶應元年十一月射洪縣にての作。

【詩意】涪江の西で多くの山のあるなかで金華山は崔嵬として紫色を呈してゐる、そのうへの方にはこき藍色の天があつてそのうへから垂れた光りが瓊の臺を抱きかかへてゐる。』自分はきつたてになつてゐる大きなたにのそばに舟をつないで、それから上陸してつゑをついて溪流のうねうねしたところの奧をきはめた。さうして高いところにあがつて四方をながめながらたかいいただきから見おろした川や谷があつさりした色で前に展開してゐる、雪嶺をながめるともはや日光は沒してしまひ、霜どきの鴻が十分のあはれさをもつて鳴いてゐる。そこへ玉女や仙人がおまゐりに來て霧のやうにもやもやと香煙をたいて跪き禮拜をしてゐる。』陳公の讀書堂はといふと青苔のはえたところに石の柱がかたむいてをる。ときに自分の悲みをそへるがごとく風が吹き起る、之によつて自分の情もますますはげしくなりこの千古の雄才についていたましくおもふのである。』

陳拾遺故宅(一)

拾遺(二)平昔居。大屋尙(三)脩椽。
(四)悠揚荒山日。(五)慘澹(六)故園煙。
(七)位下(八)曷足傷。所貴者(九)聖賢。
(一〇)有才繼(一一)騷雅。(一二)哲匠(一三)不比肩。
公生(一四)揚馬後。名與日月懸。
(一五)同遊英俊人。多(一六)秉輔佐權。
(一七)彥昭(一八)超玉價。(一九)郭震起(二〇)通泉。
到今(二一)素壁滑。(二二)灑翰(二三)銀鉤連。
(二四)盛事(二五)會一時。此堂豈千年。
(二六)終古(二七)立忠義。(二八)感遇有遺篇。

陳拾遺の故宅

拾遺平昔の居、大屋尙脩椽。
悠揚たり荒山の日、慘澹たり故園の煙。』
位下ること曷ぞ傷むに足らむ、貴き所の者は聖賢なり。』
才有り騷雅を繼ぐ、哲匠も肩を比せず。
公、揚馬の後に生れ、名、日月と懸る。』
同遊英俊の人、多く輔佐の權を秉る。
彥昭、玉價超えたり、郭震、通泉より起る。
今に到つて素壁滑なり、灑翰、銀鉤連る。』
盛事會一時のみ、此の堂豈千年ならむや。
終古、忠義を立つ、感遇、遺篇有り。』

【字解】【一】故宅　陳子昂の宅は射洪縣の東七里、東武山下に在りと。【二】平昔　むかし。【三】脩椽　ながきたるき。【四】悠揚　ゆつたりしたさま。【五】慘澹　ものがなしきさま。【六】故園　舊苑の意。【七】位下　子昂は右拾遺の官なれば位ひくし。【八】曷　何ぞ。【九】聖賢　聖人賢人。【一〇】有才　才は文才。【一一】騷雅　離騷、詩の大雅小雅。【一二】哲匠　當代のすぐれたる作家。【一三】不比肩　子昂とは肩をならべることができぬ。【一四】揚馬　揚雄・司馬相如、並に蜀の人。【一五】同遊　子昂と交遊を同じくせし人。【一六】秉輔佐權　天子を輔佐する權力をにぎる、宰相となりしをいふ。【一七】彥昭　趙彥昭。彥昭は甘州の人、中宗の時、中書侍郎・同中書門下三品に累遷す。【一八】超玉價　玉價はその人物の價、超とは他の衆多のものよりこえてゐること。【一九】郭震　後の「過郭代公故宅」詩をあはせ見るべし。【二〇】通泉　縣の名、梓州の東南百三十里にあり、郭震は此地に尉たり、それより世にあらはる。【二一】素壁　故宅のしらかべ。【二二】灑翰　揮毫をいふ、故宅に趙彥昭・郭元震の題壁の文字ありといふ。【二三】銀鉤　ぎんのかぎ、書體の筆蹟の形容なり。【二四】盛事　英俊時を同じくせしこと。【二五】會一時　たまたまあるひとときだけのこと。【二六】終古　萬古に同じ、永久の義。【二七】立忠義　唐に對して忠義の道をうちたてる、則天武后の時、之をそしる意をのべしことをさす。【二八】感遇有遺篇　「感遇」と稱するのこされた詩篇がある。子昂は感遇詩三十八篇を著はす、王適見て驚きて曰く此の子必ず天下の文宗とならん、と。子昂の作は唐の文章を一變するに功ありしものなり。

【題義】射洪の陳子昂の舊宅をみてよめる詩。寶應元年射洪にての作。

【詩意】拾遺のむかしのすまひ、それは大屋でいまもながいたるきがのこつてゐる。きてみると荒山の日の光ゆつたりとさし、もとのにはの煙がものがなしさうにうかんでゐる。』拾遺は位はひくかつたがそんなことはいたむには足らぬ、人に貴しとする所のものはその人が聖賢であるや否やに在る。拾遺は文才があつて騷雅を繼ぐに足り、當世の作家といへども之と肩をならべることはできぬ。拾遺は揚雄・司馬相如以後に生れてその名は日月とともに高くかかつてゐる。』また同時交際のあつた人には英俊が多く、その人人は多くは天子を輔佐する權力をにぎつたものだ。そのうちで趙彥昭はその

人物の價、常等に超え、郭震は通泉縣から起つて有名なものになつた。いまもなほ故宅の白壁なめらかにひかり、この二人の筆のあとが銀鉤のごとくつらなつてのこつてをる。』ただかかる英俊等がそろつてゐたことはたまたま一時だけのことであるし、此の家の堂だとてよもや千年もつづくはずもなからう。しかし拾遺には感遇詩といふのこされたる詩篇があつて、そこに於て永遠に忠義の道を建立されてをる。これこそ不朽なるものである。』

謁文公上方

文公に上方に謁す

野寺隱喬木。山僧高下居。
野寺、喬木に隱る、山僧、高下に居る。

石門日色異。絳氣橫扶疎。
石門、日色異なり、絳氣橫はりて扶疎たり。

窈窕入風磴。長蘿紛卷舒。
窈窕、風磴に入る、長蘿、紛として卷舒す。

庭前猛虎臥。遂得文公廬。
庭前、猛虎臥す、遂に文公の廬を得たり。』

俯視萬家邑。煙塵對階除。
俯して視る萬家の邑、煙塵、階除に對す。

吾師雨花外。不下十年餘。
吾が師、雨花の外、下らざること十年餘。

長者自布金。禪龕只宴如。
長者自ら金を布く、禪龕只宴如たり。

大珠脫玷翳。白月當空虛。
大珠、玷翳を脫す、白月、空虛に當る。』

甫也南北人。蕪蔓少耘鋤。
甫也は南北の人なり、蕪蔓、耘鋤少し。

久遭詩酒汙。何事忝簪裾。
久しく詩酒の汙に遭へり、何事ぞ簪裾を忝なうせり。

王侯與螻蟻。同盡隨丘墟。
王侯と螻蟻と、同じく盡きて丘墟に隨ふ。

願聞第一義。迴向心地初。
願はくは第一義を聞かむ、心地の初に迴向せん。

金篦刮眼膜。價重百車渠。
金篦、眼膜を刮る、價は百車渠よりも重し。

無生有汲引。茲理儻吹噓。』
無生、汲引有らむ、茲理儻しくは吹噓せられむ。』

【字解】【一】文公　僧名、寺名を逸せり。【二】上方　寺は山上にありとみゆ、高處をさして上方といへり。【三】絳氣　あかき霞の氣。【四】扶疎　まばらなるさま。【五】窈窕　おくふかきさま。【六】風磴　風の吹く石の階段。【七】紛　みだるるさま。【八】卷舒　まかれたりのびたり、つるの風になぶらるる様子。【九】猛虎臥　僧の德に服しておとなし。【一〇】萬家邑　けだし蘇城をさす。【一一】吾師　文公をさす。【一二】雨花　法を說くこと、法雲が法華經を講ぜしとき天より花が雨のごとくくだりしといふ。【一三】不下　下とは山より下ること。【一四】長者自布金　善施長者、卽ち給孤獨が逝多太子の園地に黃金を敷きつめ、それほどの錢にて園を買ひとりて精舍を建てしはなし。【一五】禪龕　龕は塔下の室なり、これ坐禪の室をいふ。【一六】宴如　晏如に同じ、やすらかなるさま。【一七】大珠　おほきな眞珠。【一八】玷翳　かけ、くもり。【一九】白月　しろくかがやいた月、上句の珠、この句の月は竝に性の圓明なることのたとへなり。【二〇】甫也　自己をさす、也の字はつけ字なり。【二一】南北人　東西南北に飄泊するもの。【二二】蕪蔓　くさあれはびこる、性といふ田地を手入れせぬこと。【二三】耘鋤　くさぎり、すく。【二四】忝簪裾　簪裾はかんざし、

簪服のすそ、これは官吏の服裝をいふ、杜甫かつて拾遺の官たり、忝とはその資格もなきに之をうけ居たりといふなり。【二五】螻蟻　けら、あり。【二六】盡　死滅すること。【二七】隨丘墟　丘墟とは墓場をいふ。【二八】第一義　佛法の根本義。【二九】迴向　ふりむいてそちらへ赴くこと。【三〇】心地初　心のいちばんの初のさま。【三一】金篦刮眼膜　醫療のことのたとへなり、「涅槃經」に人の心をなほすことをたとへて、めくらが目をなほしてもらひに良醫のところへゆくに、良醫は金の篦を以て其の眼膜を抉りてなほすがごとし、との話あり。【三二】車渠　石の美なるもの。【三三】無生　佛教の語、無生法なり、無生法とは眞如實相をいふと。【三四】汲引　文公が自分を井水をくむにつるべなはをひくごとくひつぱつてくれること。【三五】茲理　佛教の至極の道理。【三六】儻　もしくは、ひよつとすると、萬一。【三七】吹噓　いきを吹きかけてくれる、世話をしてくれること。

【題義】　文公といふ僧を寺の上方にたづねて面會せしことをよめり。舊本に寶應元年梓州の詩の內に列し、仇氏之に從へり。余も之に依る。

【詩意】　田野にみゆる寺、その寺は喬木のなかにかくれてをり、僧たちは或は高いところ、或はひくいところにおもひおもひに住居してゐる。石の門をすぎるとはや日光のさまも俗界とちがふ樣であり、金霞の氣がまばらに橫はつてゐる。だんだんおくふかく風の吹きつける石段の路をはひつてゆくとせのたかくのびた蘿が風になぶられてみだれてちぢんだりのびたりしてゐる。寺の庭前きには猛虎が臥てゐる、ここまできてやつと文公のおいでになるいほりにであうた。』ここからしたの縣城をうつぶして視ると、きざはしの前には煙塵がまむかうにみえる、吾が師（文公）におかれてはここで御說法をなさるほかには山から十年あまりもおくだりはならぬ。この寺は長者が黃金をしきつめてそれを寄附してたてたので、その禪室のなかにやすらかにすまはれてをる。たとへばかけもくもりもない大きな眞珠のごとく、また虛空にあたつててつてをる明皎皎たる月のごときものである。』わたくしは飄泊をしてをる人間であつて心性の田地は草だらけにあらして草ぎることも鋤くこともしたことがないのである、それにながく詩だの酒だのといふもののけがれをうけ、またどういふしだいかふつつかながら役人のきものをきたこともござる。かんがへてみると王侯でもありけらの蟲でもつまりは同じ樣に死滅して墓場へ葬られてしまふものである。どうぞわたくしも自分の心を心の最初の姿のところへむけかへさせ佛法の根本第一義をおききいたしたいものでござる。あなたの金の篦でわたくしのめくら目の眼膜をけづりとつていただくならばそれは百の車渠にもましたたふといものである。どうぞ眞如實相無生の法の方へお手ひきをねがひたいもので、とても及びもつかぬこととはおもひますが御息のかかりぐあひによつてはひよつとすると至上の道理にも達することができるかもわかりませぬ。』

奉レ贈二射洪李(一)四丈一(二)明甫

射洪の李四丈に贈り奉る　明甫

丈人(三)屋上烏。人好烏亦好。

丈人屋上の烏、人好く烏亦好し。

人生(四)意氣豁。不(五)レ在二相(六)逢早一。

人生、意氣豁ならば、相逢ふの早きに在らず。』

(七)南京(八)亂初定。(九)所向(一〇)色枯槁。　南京、亂初めて定まり、向ふ所色枯槁す。
(一一)遊子(一二)無根株。(一三)茅齋(一四)付秋草。　遊子、根株無し、茅齋、秋草に付す。
(一五)東征下(一六)月峽。(一七)挂席(一八)窮海島。　東征、月峽より下り、席を挂けて海島を窮めむとす。
(一九)萬里(二〇)(二一)須十金。(二二)妻孥未相(二三)保。」　萬里、十金を須つ、妻孥未だ相保んせず。』
(二四)蒼茫風塵際。(二五)蹭蹬(二六)麒麟老。　蒼茫風塵の際、蹭蹬、麒麟老ゆ。
(二七)志士懷感傷。(二八)心胸已(二九)傾倒。」　志士、感傷を懷かむ、心胸已に傾倒せり。』

【字解】【一】李四丈　丈は丈人の略、年長者に對する敬稱。【二】明甫　李の字なるべし。【三】屋上烏　「尙書大傳」に愛其人者、愛其屋上之烏」とみゆ、詩は其語よりおもひつきしならんも意味は同じからず。【四】意氣豁　豁はひろきこと、意ひろければ他人の與を容るるに足れり、これは李の意のひろきをいふ。【五】不在　貴ぶべき點がそこにはない。【六】相逢早　會合することが早き時期にあること。【七】南京　成都をいふ、已に見ゆ。【八】亂初定　亂は徐知道の反亂。【九】所向　みわたすところ。【一〇】色枯槁　人民、事物の樣子に生きたさまなきこと。【一一】遊子　たびびと、自己をさす。【一二】無根株　一處に定著せざるをいふ。【一三】茅齋　草堂の書齋。【一四】付秋草　秋草のあれたるままにしてある。【一五】東征　東方にゆく。【一六】月峽　明月峽、渝州にあり、三峽の口なり。【一七】挂席　席はむしろでつくりし帆。【一八】窮海島　うみにある島のはてまでゆききはめる。【一九】萬里　旅程のながきをいふ。【二〇】須　いりようなといふこと。【二一】十金　漢のころ一兩(兩はめかたの名)の金は十千錢にあたる、十金は十萬錢なり。【二二】妻孥　妻子。【二三】保　安んずる。【二四】蒼茫　はつきりせぬさま。【二五】蹭蹬　勢を失ひつかれし貌。【二六】麒麟　名馬、自ら比す。【二七】志士　李をさす。【二八】心胸　李のこころ。【二九】傾倒　我が方へすつかりかたむける、此詩の「意氣豁」及び「心胸傾倒」は「從事行」の「神傾意豁」と同意ならん。

【題義】射洪縣の李某に贈りたる詩。詩によれば作者蜀を出でて東遊するの意あり、旅費の周旋を乞ひたるなり、舊本寶應元年梓州の詩内にあり、仇氏之に從ふ、今之に依る。

【詩意】あなたの屋のうへに烏がゐる。主人がよい人であるから烏までもよい。(烏まで愛せらるる人ならばもちろん人には同情せらるるにちがひない。)』いま南京(成都)では兵亂がやつと定まつたばかりで、みわたす所どこも枯槁憔悴の色がある、自分は根のない草木のやうなもので飄泊生活をしてをり、草堂の書齋も秋草の荒るるがままにまかせてある。これから東方へでかけて明月峽から江を下り席帆を掛けて海島までも窮めてみようとおもふ、妻子さへ安らかにさせることができぬので萬里のたびには十萬錢のかねがいるのである。』風塵みなぎりて前路あてどもなきをり、麒麟の駿馬も勢を失うて老いてしまつた。志士たるあなたは已にその心をわたくしに向つて傾倒せられたあひだがらであるうへはこのわたくしの境遇を見てさだめて感傷をいだき御同情してくださることとおもふ。

(一)早發。射洪縣南途中作
早に發す、射洪縣南途中の作

將老憂(二)貧窶。筋力豈能(三)及。　將に老いむとして貧窶を憂ふ、筋力豈能く及ばむや。

征途乃侵(四)星。得(五)使(六)諸病入。　征途乃ち星を侵す、諸病をして入らしむるを得むや。
鄙(七)人寡道氣。在(八)困無獨立。　鄙人、道氣寡し、困に在つて獨立すること無し。
俶(九)裝逐(一〇)徒旅。達曙淩(一一)險澀。　俶裝、徒旅を逐ふ、曙に達して險澀を淩ぐ。
寒日出霧遲。清江轉(一二)山急。　寒日、霧を出づること遲く、淸江、山に轉ずること急なり。
僕(一三)夫行不進。駑馬若維(一四)縶。　僕夫行けども進まず、駑馬維れ縶ぐが若し。
汀洲稍疎(一五)散。風景開怏(一六)悒。　汀洲稍く疎散なり、風景、怏悒たるを開く。
空慰所(一七)尙懷。終非曩(一八)遊(一九)集。　空しく尙ぶ所の懷を慰む、終に曩の遊集に非ず。
衰顏(二〇)偶一破。勝(二一)事難屢挹(二二)。　衰顏偶〻一たび破る、勝事屢〻挹み難し。
茫(二三)然阮(二四)籍途。更灑楊(二五)朱泣。　茫然たり阮籍の途、更に楊朱の泣を灑ぐ。

【字解】【一】早發　あさはやく出發すること、此の二字は詩の本題なり、射洪縣南途中作はその說明に添へたる句なり。【二】貧窶　窶はやつやつし、貧の甚しきさま。【三】及　壯時の强健なるにおひつく。【四】侵星　星光をおかすとは非常にはやく出發すること、此句は下句と連絡してみるべし。【五】得　豈可得の義、反語にみる、元來「豈可得」の三字が「征途」の上にあると同じ意なり。【六】諸病入　さまざまの病氣がからだにはひつてくる。【七】鄙人　いやしきもの、自己を謙遜していふ。道氣仙人の氣象、仙人は險路などにたへる力を有す。【八】在困　困は困難。【九】俶裝　俶は始なり、裝を始むるとはあさ旅行の用意をすること。【一〇】徒旅　たびのなかま。【一一】險澀　道路のなんぎなところ。【一二】轉山急　山に隨つて急に屈曲する。【一三】僕夫　めしつかひ。【一四】維縶　縶は「つなぐ」、維はことばなり。【一五】疎散　からりとひらける。【一六】怏悒　むれのふさぐこと。【一七】所尙懷　尙は好尙、山水をみるは自己の平生このみたつとぶ所なり。【一八】曩　さきの日。【一九】遊集　同志とつどひあそぶ。【二〇】顏、破　かほのしわをのばす、につこりする。【二一】勝事　よき景色。【二二】挹　とる、我がものにすること。【二三】茫然　前程不明のさま。【二四】阮籍途　窮途をいふ、已に屢〻みゆ。【二五】楊朱泣　楊朱、歧路を見、その南すべく北すべきによりて泣きたりとの話「淮南子」にみゆ。

【題意】　あさはやく出發せしことをのぶ。これは射洪縣の南の途中での作である。射洪から又その南の通泉縣へゆく途上の作。生活の計をなすためにでかけしなるべし。時は寶應元年十一月。

【詩意】　としよりになりかけて貧乏を心配するため旅をする、どうして筋力が若い時分のやうになれるものか。やせがまんをして星の光を侵して途にでださうものならいろいろの病氣がはひつてくるだらう、そんなことはできぬ。』自分は仙人の氣象をもたず、困難に在つてひとりだちはできぬ、だからあさのたび仕度をしても途づれのあとをおひ曙になつてからなんぎなみちをとほる。さむぞらの太陽はおそく霧のなかから出で、淸らかな江水は山にくつついて急に折れまがる。しもべはあるくけれども前へはすすまず、やくざ馬はつないであるかの樣にちつともあるかぬ。』汀の洲があるところへくるとしだいにそこらがからりとした樣でその風景がふさがつたむねをすけてくれる。しかしいたづらに平生からしたうてをる心をなぐさめるのみでたうてい往年のあそびつどひとはおなじでない。このけしきで偶然ひとたびは衰へた顏のしわをのばすけれども、それもこの佳景さへそんなにたびた

び我がものとすることはできぬのである。ただ茫然と阮籍の如き窮途に立つてそのうへに方向に迷ふ所の楊朱の涙をそそぐのである。』

(一)通泉驛(二)南去通泉縣十五里山水作

通泉驛、南のかた通泉縣を去ること十五里の山水の作

(三)溪行衣自濕。(四)亭午氣始散。　溪行衣自ら濕ふ、亭午、氣始めて散ず。
冬溫(五)蚊蚋集。人遠鳧鴨亂。　冬溫にして蚊蚋集まり、人遠くして鳧鴨亂る。
(七)登頓生(八)曾陰。(九)攲傾出高岸。』　登頓、曾陰生ず、攲傾、高岸出づ。』
驛樓衰柳側。縣郭輕煙畔。　驛樓、衰柳の側、縣郭、輕煙の畔。
(一〇)一川何綺麗。盡日窮壯觀。　一川何ぞ綺麗なる、盡日、壯觀を窮む。
山色遠(一一)寂寞。江光夕(一二)滋漫。』　山色遠く寂寞、江光夕に滋漫。』
(一三)傷時愧(一四)孔父。(一五)去國同(一六)王粲。　傷時、孔父に愧ぢ、去國、王粲に同じ。
我生苦飄零。(一七)所歷有嗟嘆。』　我が生、飄零に苦しむ、歷る所嗟嘆有り。』

【字解】〔一〕通泉驛　梓州の東南百三十里、射洪縣よりは東南七十里にあり、通泉驛の三字が本詩の題にして「南去」云云は其の說明にそへたることばなり。〔二〕南去通泉縣十五里山水　通泉縣の北十五里のところの山水をいふ、沈家抗といふ處なりと。まだ縣城へつかぬ前のことなり。〔三〕溪行　たにがはにそうてゆく。〔四〕亭午　正午。〔五〕氣　雲氣。〔六〕蚊蚋　「か」「こばへ」。〔七〕登頓　のぼつたり、やすんだり。〔八〕曾陰　曾は層に同じ、かさなれるくもり。〔九〕攲傾　かたむく。〔一〇〕一川　涪江なり。〔一一〕寂寞　ひつそり、みえなくなるをいふ。〔一二〕滋漫　ゆふばえの水上にましあふれること。〔一三〕傷時　時世をいたむ。〔一四〕孔父　孔子をいふ。〔一五〕去國　故國をはなれる。〔一六〕王粲　魏の王粲、都を去て南方荊州に至り、故國をおもひ登樓賦をつくる。〔一七〕所歷　經過するところ。

【題義】射洪から通泉縣の方へ赴くとき、縣のてまへ十里ばかりの通泉驛で山水をみてつくつた詩。寶應元年十一月の作。

【詩意】たにがはにそうてゆくと衣がひとりでにぬれる、それがひるごろになるとやつと雲氣が散つてしまつた。冬ではあるがあたたかいので蚊だの蚋だのがたかつてくる、まだ人がちかづかぬのに鳧鴨などがみだれたつ。のぼつたりくだつたりするうちにあついくもりができ、かたむいてあぶなげに高い岸が突出たりしてゐる。』やがて縣の郭がうすい煙のほとりにみえ、驛樓がげんきのない柳のそばにある。川のながめはなんでかほどに綺麗であるか、一日ぢう壯觀をあかずみきはめる。そのうちにゆふばえだけは江面にひろがり遠方の山の色はあるかなきかにきえゆく。』自分は時世を傷むことは孔夫子には及ばぬので愧ぢるが、故國を去つて悲みを抱くことは王粲と同じである。自分の

生活は飄泊零落にこまつてゐるので經過するところどこでもなげきをおこすのである。』

過郭(一)代公故(二)宅

郭代公が故宅に過る

豪(三)俊初未(四)遇。其迹(五)或脫略(六)。
豪俊初め未だ遇はず、其の迹或は脫略せり。

代(七)公尉(八)通泉。放(九)意何自若(一〇)。
代公、通泉に尉たり、意を放にする何ぞ自若たる。

及夫登(一一)袞冕。直(一二)氣森(一三)噴(一四)薄。
夫の袞冕に登るに及んで、直氣、森として噴薄す。

磊(一五)落見異(一六)人。豈伊(一七)常(一八)情度。』
磊落、異人を見る、豈伊常情もて度らむや。』

定(一九)策神龍後。宮中翕淸廓。
策を定めて神龍の後、宮中、翕として淸廓す。

俄(二〇)頃辨(二一)尊親。指(二二)揮存顧(二三)託。
俄頃、尊親を辨じ、指揮、顧託を存す。

羣(二四)公有慙色。王室無削弱。
羣公、慙色有り、王室、削弱無し。

迥出名臣上。丹(二五)青照臺閣。』
迥に名臣の上に出づ、丹青、臺閣を照す。』

我行得遺跡。池館皆疏(二六)鑿。
我行いて遺跡を得、池館皆疏鑿せらる。

壯(二七)公臨(二八)事斷。顧(二九)步涕橫落。
公が事に臨みて斷せしを壯とす、顧步して涕横に落つ。

精魄凜如在。所(三〇)歷終蕭(三一)索。
精魄、凜として在すが如し、歷る所終に蕭索たり。

高詠寶(三二)劍篇。神(三三)交付冥(三四)漠。』
高く詠す寶劍の篇、神交、冥漠に付す。』

【字解】【一】郭代公　郭震、字は元振、魏州貴鄕の人、玄宗の朝、代國公に封ぜらる。【二】故宅　これは通泉縣の尉たりしときの居宅をいふ。【三】豪俊　すぐれた人物、郭震をさす。【四】未遇　時世にであはぬ。【五】迹　行のあと。【六】脫略　小事を簡略にして心にとめぬ、この脫略は次の放意とおなじことをさす。【七】代公　震をさす。【八】尉　縣令の次ぎの官。【九】放意　きままにする、震が尉たりしとき私鑄を鑄、又は民財を奪ひて四方を濟ひなどし、任俠にして氣を使ひ同類千人萬人に至るといへり。【一〇】自若　平氣なさま。【一一】登袞冕　宰相の地位にのぼること、袞は卷き龍の模樣あるきもの、冕はかんむりなり、かかる禮服をきる身分となること、震は先天二年に兵部尙書を以て同中書門下三品となり、政事をあづかりきく。【一二】直氣　正直の意氣。【一三】森　嚴肅なさま。【一四】噴薄　ふきだす、先天二年に震政事をあづかりきゝしとき太平公主、竇懷貞と黨を結び玄宗(時に太子)を廢せんと謀る、睿宗猶豫して決せず、ただ震廷にて爭ひ詔を受けず。【一五】磊落　不羣の貌。【一六】異人　非凡の人。【一七】伊　これ。【一八】常情度　なみなみのこころではかる。【一九】定策神龍後宮中翕淸廓　此句舊解に「定策神龍後、宮中翕淸廓」とよませたり、而して定策の事實が先天以後に在りて事實とあはぬゆゑ神龍といふはさかのぼりて禍根の胚胎せしときを記したるなりとせり。これは無理な解なり。此句の形はかくあれども作者の意は「定策」二字にて句、「神龍後宮中翕淸廓」の八字にて句、とするつもりなりと解すべきなり、定策が先天に在ることは動かさずして可なり。定策とは玄宗を廢せんとしたるを玄宗を擁立するはかりごとを定めたるをいふ、神龍は中宗の年號にして西紀七〇五、七〇六なり、先天は睿宗の年號にして西紀七一二、七一三なり、宮中は奧向きのこと、當時中宗の皇后韋氏、太平公主、等のさわぎありて奧向きみだれたり、翕はあつまるかたち、すつかりといふこと、淸廓とはきつぱりと掃除してきよめること。【二〇】俄頃　しばらくのうちに。【二一】辨尊親　尊と親とについて區別する。君臣の關係では玄宗が尊位を得、父子の關係では玄宗が親子相傳して帝位をふむに至りしことをさす。【二二】指揮　さしづする。【二三】顧託　睿

宗の御依託。玄宗の太平公主竇懷貞を誅するや宮城大に亂る、諸相みな外省にかくる、震ひとり侍す、睿宗、玄宗の兵至るときき樓下に投ぜんとす、震之を扶けてあつく勸めて阻止す、此等必しも睿宗の依託に由るにあらざれども辭をかざりていへるなり。〔二四〕羣公　他の權臣等。〔二五〕丹青照臺閣　丹青は畫像、臺閣のうへに像をかかぐるにより像が之を照すといふ、郭震は玄宗の廟に配饗せらる、ただ像をゑがかれしやは不明、舊解は之を震に屬せしめたるも或は名臣へかかるものならんも知れず、然らば「臺閣に像をゑがかれてゐる名臣の上にいづ」の義となるなり。今舊解を用ひおく。〔二六〕疏鑿　ほりわりをつくること。〔二七〕壯　壯なりとして欽慕するなり。〔二八〕臨事斷　大事に當つてよく決斷せしこと、玄宗を擁立せしことをさす。〔二九〕顧步　左右をかへりみながらあるく。〔三〇〕所歷　自己のとほりしところ、卽ちこの池館のあとをさす。〔三一〕蕭索　さびしきさま。〔三二〕寶劍篇　震が通泉の尉たりし當時の作なり、震則天武后にめしだされしときこの篇を上る、武后數十本を寫して遍く學士に賜はしめしといふ。原文別にのちに載す。〔三三〕神交　精神と精神との交り。〔三四〕冥漠　天、幽冥界をいふ。

【題意】通泉縣にある代國公郭震が故宅を見まひてつくれる詩。寶應元年十一月の作。

【詩意】豪俊とよばるるほどの人も初め時世にであはぬときは其の行迹は小事にかかはらぬことがあるものだ。我が代國公郭震は通泉縣に尉であつたときどうしてあんなに平氣でわがままをやつてゐたか。それがかの袞冕の服を身につける樣な地位にのぼるや正直の氣が嚴然としてはきだされた、じつに磊落たる非常の人物たるを見るので、これはとてもなみなみのこころではかれるわけのものではない。』公が先天の時に大策を定めてから神龍以後の宮中の亂脈はすつかりひとまとめに掃除して淸められた。公は咄嗟の間に玄宗の尊にして且つ親たることを辨別し、大事をさしづして睿宗の依託を存立した。之にくらべると他の羣臣は愧づるの色がある。公があつたから王室も削りよわめらるることなくなつた。だから公ははるかに名臣以上にあつて、その像は臺閣にかがやいてゐる。(或は公は臺閣に畫がかれてゐる名臣のうへにある。)』自分はいまここをあるいて公の遺跡を得たが、もとの池や館のところはみなほりわりになつてゐる。自分は公がよく大事にのぞんで決斷したことを壯なりとして、このさまをみてはあるきながら淚がよこさまに落ちるのである。公のたましひは凜然としてなほ存在してゐるかのごとくであるが、既に經過する所はけつきよくかくさびしいやうすである。自分はただ公の作である寶劍篇を高く詠じてこころどうしの交りは之を天に付するのみである。』

寶劍篇　　郭震

君不見昆吾鐵冶飛炎煙。紅光紫氣俱赫然。良工鍛鍊凡幾年。鑄作寶劍名龍泉。龍泉顏色如霜雪。良工咨嗟歎奇絕。琉璃玉匣吐蓮花。錯鏤金環生明月。正逢天下無風塵。幸得周防君子身。精光黯黯青蛇色。文章片片綠龜鱗。非直結交遊俠子。亦曾親近英雄人。何言中路遭棄捐。零落飄淪古獄邊。雖復沈埋無所用。猶能夜夜氣衝天。

觀薛稷〔一〕少保書畫壁〔二〕

薛稷少保が書畫の壁を觀る

少保有古風〔三〕。得之陝郊篇〔四〕。　少保、古風有り、之を陝郊の篇に得たり。

惜哉功名（五）忤。但見書畫傳。　惜しい哉功名忤ふ、但見る書畫の傳はるを。

我遊（六）梓州東。遺跡（七）涪水邊。　我、梓州の東に遊ぶ、遺跡、涪水の邊。

畫藏（八）青蓮界。書入（九）金牓懸。　畫は青蓮界に藏せられ、書は金牓に入りて懸る。

仰看（一〇）垂露姿。不崩亦不（一一）騫。　仰ぎ看る垂露の姿、崩れず亦騫けず。

（一二）鬱鬱（一三）三大字。蛟龍（一四）岌相纏。　鬱鬱たり三大字、蛟龍、岌として相纏ふ。

又（一五）揮（一六）西方變。（一七）發地（一八）扶屋椽。　又西方の變を揮ふ、地より發りて屋椽を扶く。

（一九）慘澹壁飛動。到今色未（二〇）塡。　慘澹として壁、飛動す、今に到つて色未だ塡しからず。

（二一）此行（二二）疊壯觀。（二三）郭薛俱才賢。　此の行、壯觀を疊す、郭薛は俱に才賢なり。

不知百載後。誰復來通泉。　知らず百載の後、誰か復通泉に來らむ。

【字解】【一】薛稷少保　薛稷、字は嗣通、敎が從子、古を好みて博雅、外祖魏徵が家に虞世南・褚遂良の墨蹟を藏す、稷之を學び遂に書を以て天下に名あり、畫も亦絕品なり。睿宗の時黃門侍郎に遷り、太子少保を歷たり、たまたま竇懷貞、太平公主に附きし故を以て誅せらる、稷は其の謀を知れりといふに坐せられて萬年縣の獄に於て死を賜はれり。稷は郭震、趙彥昭と同じく太學に遊びしことあり、蓋し郭震の關係によりて通泉縣に稷の書畫あるなり。【二】書畫壁　壁書と壁畫となり。【三】古風　五言古詩をいふ。【四】陝郊篇　稷に秋日還京陝西十里作あり、曰く、驅車越陝郊、北顧臨大河、此行見鄉邑、秋風水宥渡、西家咸陽途、日暮憂思多、傅巖既紆鬱、首山亦嵯峨、操築無昔老、采薇有遺歌、客遊節向換、人生知幾何、と。驅車越陝郊の句あるによりて之を陝郊篇といへり。【五】忤　違ひ戾るなり。【六】梓州東　東は東南、通泉をさす。【七】涪水　涪江。【八】青蓮界　佛寺をいふ。【九】金牓　金字のかんばん、額なるべし。【一〇】垂露姿　書のさま。【一一】騫　虧ける。【一二】鬱鬱　さかんなるさま。【一三】三大字　通泉縣慶善寺に薛稷の書せる「慧普寺」の楷書の三大字あり、字の徑三尺ばかりなりといふ。【一四】岌　山たかきさま。【一五】揮　筆をふるひてかく。【一六】西方變　西方諸佛の變相。【一七】發地　平地よりおこりて。【一八】扶屋椽　やれのたるきに人手にたすけられてのぼるほどの所に達するをいふ。【一九】慘澹　畫者の心を苦しめしさま。【二〇】塡　窴と同じ、「久し」なり。【二一】此行　このたびの旅行。【二二】疊　かさなること。【二三】郭薛　郭震、薛稷。

【題義】通泉縣の慧普寺にある太子少保薛稷の壁書と壁畫とをみてよめる詩。寶應元年十一月通泉にての作。

【詩意】薛少保には五言の古詩がある、自分はそれを驅車越陝郊といふ詩篇に於て之を得た。かかる文事に秀でた人であるのに功名の念をとげることができず、ただその書や畫が傳へらるるのを見るのである。自分は梓州の東南に遊び、少保の遺跡を涪江のほとりで得た。畫は佛寺に藏せられ、書は寺の金牓に於てかかげられてゐる。仰いでみると露を垂れた樣な文字の姿がくづれもかけもせず、三個の大字があたかも蛟龍の勢たかくあひまつはつてをる樣である。また西方諸佛の變相をも揮毫してあるがそれは平地から屋根のたるきのうへまでつづいてゐる。この畫者がいかに苦心したか壁が飛動してゐる樣で、今日にいたるまでその著色がふるぼけずにをる。自分のこのたびの旅行にはいくつもの壯觀がかさなつた、すなはち郭震といひ薛稷といひともに才あり賢なる人である。知らず百

年の後にははたしてだれがこの通泉の地に來るであらうか。二人に恥ぢぬ人物がくるかどうか。』

通泉縣署壁後(一)薛少保(二)畫鶴

通泉縣の署壁の後の薛少保の畫鶴

薛公十一鶴(三)。皆寫青田(四)眞。
　薛公の十一鶴、皆青田の眞を寫す。
畫色久欲盡。蒼然(五)猶出塵(六)。』
　畫色久しくして盡きむと欲す、蒼然猶塵を出づ。』
低昂(七)各有意。磊落(八)如長人(九)。
　低昂各〻意有り、磊落、長人の如し。
佳(一〇)此志氣遠(一一)。豈惟粉墨(一二)新。
　此の志氣の遠きを佳とす、豈惟粉墨の新なるのみならむや。
萬里(一三)不以力(一四)。羣遊(一五)森(一六)會神(一七)。
　萬里、力を以てせず、羣遊、森として神を會す。
威遲(一八)白鳳態。非是倉鶊(一九)隣。』
　威遲たり白鳳の態、是れ倉鶊の隣に非ず。』
高堂(二〇)未傾覆。常得慰嘉賓。
　高堂未だ傾覆せず、常に嘉賓を慰むることを得。
曝露(二一)墻壁外。終嗟風雨頻。
　墻壁の外に曝露す、終に嗟す風雨の頻なるを。
赤霄(二二)有眞骨(二三)。恥飲洿池(二四)津(二五)。
　赤霄、眞骨有り、洿池の津に飲むを恥づ。
冥冥(二六)任所往。脫略(二七)誰能馴(二八)。』
　冥冥、往く所に任す、脫略、誰か能く馴れむ。』

【字解】【一】署壁　縣の役所のかべ。【二】薛少保畫鶴　薛稷は花鳥人物雜畫を善くし、鶴を畫くことによりて名を知らる。【三】十一鶴　壁にある鶴の數をあぐ。【四】青田　浙江省にある縣の名、鶴の產地なり。【五】蒼然　すすけてぼんやりとした貌。【六】出塵　塵俗から超越してゐる。【七】低昂　つるの伏したりのびあがつたりするさま。【八】磊落　不羣のさま。【九】長人　せのたかい人。【一〇】佳　よしとして賞する。【一一】志氣遠　鶴のこころもちの塵俗からとほくはなれてゐること。【一二】粉墨　ごふん、すみ色。【一三】萬里　卽ち上句の志氣遠の遠の字の說明なり、志氣の萬里の遠きにあるさま、老鶴萬里心などあるも同じ。【一四】力　筆さきの形體的の力。【一五】羣遊　つるのむれあそぶさま。【一六】森　森然羅列するさま。【一七】會神　精神を會得する、會の字「あつむる」義にあらずして領會する義ならん。【一八】威遲　のつそりとしたさまをいふならん。【一九】倉鶊　黃鸝留（てうせんうぐひすの類）。【二〇】高堂　縣署をいふ。【二一】曝露　さらし、あらはす。【二二】赤霄　赤色のあをぞら、赤色は金氣の色を帶ぶるをいふ。【二三】眞骨　まことの鶴をいふ。【二四】洿池　たまり水の池。【二五】津　わたりばをいふ、但し、ここは單に水邊をさす。【二六】冥冥　雲ふかきところをいふ。【二七】脫略　衆鳥に頓著せぬをいふ。【二八】馴　なれちかづく、眞骨四句は暗に自己を比したり。

【題義】通泉縣の役所の壁の背面に薛稷のかいた鶴があるのを觀てよんだ詩。前詩と同時の作。

【詩意】薛少保がかいた十一匹の鶴、それはみな青田の鶴の眞相をうつしてある、畫の色は年をへたので無くなりかけてゐるが、はつきりせぬながら塵俗を超越してゐる。』うつ伏したのものびあがつたのもそれぞれ意があるし、磊落羣せずしてせのたかい人間の樣なのもある。自分はこの畫鶴のこころもちの塵俗から遠くはなれてゐるのを佳しとしてめでるのである、ただ胡粉や墨色の新しいのをほめるわけではない。萬里の遠き心をもつた趣は力づくでかいてはゐないし、たくさんのなかまがむ

れあそんでゐる様子はそれぞれその精神をよくのみこんでかかれてある。これはおほやうな白い鳳凰といつた様な態であつて、倉鶊などの親類すぢではないのである。』いまこの縣のざしきは傾覆もしないからここでお客を會合したりするときこの畫でそれらの人たちの心を慰めることができるが、壁の外にかかる名畫をさらしておくといふは、つまりはあめ風がしきりにやつてきてこはしてしまひはせぬかとなげかざるを得ぬ。畫鶴をみて更に感ずる所は、ここにはほんものの鶴が赤氣の横はるあをぞらに居る、この鶴はたまり水の池のほとりなどに水を飮むことを恥としてをる、だから雲中の奥ふかくくらいところにかつてにゆかうとしてゐる、そこへいつてしまへば羣鳥からはなれてしまふのでだれがまた之に近づきなれることができようぞ。』

陪(一)王侍御宴通泉東山野亭

王侍御に陪して通泉の東山の野亭に宴す

(二)江水東流去。清樽日復斜。　江水、東流し去る、清樽日復斜なり。
(三)異方同宴(四)賞。何處是京(五)華。　異方同じく宴賞す、何の處か是れ京華ぞ。
(六)亭景臨山水。村煙對浦沙。　亭景に山水に臨み、村煙に浦沙に對す。
狂歌遇形(七)勝。得醉卽爲家。　狂歌、形勝に遇ふ、醉ふことを得れば卽ち家と爲す。

【字解】【一】王侍御　前に王侍御倫あり、これは果して王綸なるや否やを知らず。【二】江水　涪江。【三】異方　他郷。【四】宴賞　さかもりなし、風景を賞美する。【五】京華　みやこ。【六】亭景　景は影に同じ、ゆふがた亭のかげの地上におつるころの意。【七】形勝　風景のすぐれしところ。

【題義】王侍御のともをして通泉縣の東山の野亭に宴した詩。寶應元年十一月通泉にての作。

【詩意】涪江の水は東に流れ去る、清樽のうへに夕日がはやかたむきだした。他郷とはいひかく宴賞を同じくしてをれば京華はどこだらうとかまふことはない。日かたむきて亭影の生ずるころ、この山水に臨み、村煙の起るをみつつ浦上の沙に對してをる。かかる佳景にであうては自分は狂歌を發するものであり、苟も醉ふことができればすなはちそこをわが故郷の家とかんがへるのである。

陪(一)王侍御同登東(二)山最高頂宴。姚(三)通泉晩攜酒泛江

王侍御に陪して同じく東山の最高頂に登り宴す。姚通泉晩に酒を攜へて江に泛ぶ

姚江美(四)政誰(五)與儔。　姚江の美政誰か與に儔せむ、
不滅昔時陳(六)太丘。　滅せず昔時の陳太丘。
(七)邑中上客有杜(八)史。　邑中の上客杜史有り、
(九)多暇日陪(一〇)驄(一一)馬遊。　多暇日に驄馬の遊に陪す。』

【字解】【一】王侍御　前詩の王と同人なるべし。【二】東山　通泉の東山、前詩のそれと同じ。【三】姚通泉　通泉縣の縣令姚某。【四】美政　りつぱな政治。【五】誰與儔　儔は「たぐひ」なり、だれが姚公と

東山高頂羅ニ珍羞一。
下顧ニ城郭一銷ニ我憂一。
清江白日落欲レ盡。
復攜ニ美人一登ニ綵舟一。
笛聲憤怨哀ニ中流一。
妙舞逶迤夜未レ休。
燈前往往大魚出。
聽レ曲低昂如レ有レ求。』
三更風起寒浪湧。
取レ樂喧呼覺ニ船重一。
滿空星河光破碎。
四座賓客色不レ動。
請ニ公臨レ深莫ニ相違一。

東山の高頂に珍羞を羅ぬ、
下城郭を顧みて我が憂を銷す。
清江白日、落ちて盡きむと欲す、
復美人を攜へて綵舟に登る。
笛聲憤怨、中流に哀し、
妙舞逶迤として夜も未だ休まず。
燈前、往往、大魚出づ、
曲を聽き低昂求むる有るが如し。』
三更風起つて寒浪湧く、
樂みを取つて喧呼し船の重きを覺ゆ。
滿空の星河光り破碎す、
四座の賓客色動かず。
請ふ公深きに臨む相違ふこと莫れ、

かたならぶるものぞ。【六】陳太丘　後漢の陳寔なり、嘗て聞喜（縣名）の長となり、また太丘の長となり、よく管内を治む。【七】邑　縣をいふ。【八】柱史　柱下史の略、御史の官をいふ、即ち王侍御。【九】多暇　縣治のうへに仕事なくてひま多し。【一〇】日陪　日は日日。【一一】驄馬遊　驄馬は桓典が故事、屢〻前にみゆ、驄馬遊は王侍御のあそびをいふ。【一二】羅　羅列。【一三】珍羞　めづらしきお膳のさかな。【一四】綵舟　さいしきした舟。【一五】逶迤　うねうねするさま。【一六】曲　歌曲。【一七】低昂　浮沈するさま。【一八】三更　夜半。【一九】船重　船の進まざるさま。【二〇】星河　ほし、あまのがは。【二一】色不動　顔色をうごかさぬ、

迴レ船罷レ酒上レ馬歸。
人生歡會豈有レ極。
無レ使ニ霜露霑ニ人衣一。』

船を迴らし酒を罷め馬に上つて歸らむ。
人生歡會豈極り有らむや、
霜露をして人衣を霑さしむること無れ。』

平氣でかへるけしき無きをいふ、仇氏注に斂レ容知レ懼といへるは取らず。【二二】公　姚をさす。【二三】臨深　如レ臨ニ深淵一、如レ履ニ薄氷一の詩の語をさす。【二四】莫相違　臨深云云の戒めに違ふことなかれ。【二五】霜露霑人衣　あまりに夜ぶかなをいふ。

【題義】　王侍御のともをしてともに東山のてつぺんへあがつてさかもりをした。ところが晩になつて通泉縣令の姚氏が酒をたづさへてさらに涪江に舟をうかべて遊びをした。寶應元年十一月通泉にての作。

【詩意】　姚君の政治のりつぱなことはだれも肩をならべるものがない。昔しの太丘の令陳寔にもおとらぬほどである。それゆゑに縣の上客としていま王侍御がをらるるが、姚君はひまが多いから毎日王侍御の遊びのともをしてをられる。』先づ東山の絶頂でごちそうをならべ、縣の城郭をみおろして自分の憂さばらしをし、涪江に日が落ちてしまはうとするや、また美人をつれてうつくしくかざつた舟に登つた。笛の聲はいかりうらむがごとく中流であはれな音をだす、美人の妙なる舞すがたはうねうねとして夜になつてもやまぬ。燈の前には時時大きな魚がでて、美人の歌曲をきいてうきつしづみつなにか求むる所あるかの樣子である。』夜半になると風が吹きおこつて浪がわきだした。ががやが

やさわいで樂みをしてゐるので船あしは重きかとおもはれさらに進まない。空はいつぱいに星や天の河がみちてその光が水面におちてくだける、それでも一座のおきやくたちはかへらうとする氣色もない。わたくしはいふ、どうぞ桃公よ古聖人の「臨深」の戒めに逢ひたまふな、船をめぐらして酒をやめ、馬にうちのつて歸りませう。人生のおもしろき會合といふものははてしのないものである。いいほどのところでくぎりをつくべきである。あまりに夜ふかしをして霜や露に人の衣をうるほさせるやうなことをしたまふな。』

漁陽

漁陽突騎猶精銳。　　漁陽の突騎は猶精銳なるも、
赫赫雍王都節制。　　赫赫たる雍王都て節制す。
猛將翻然恐後時。　　猛將翻然として時に後れむことを恐る、
本朝不入非高計。　　『本朝に入らざるは高計に非ず。』
祿山北築雄武城。　　祿山北のかた築く雄武城、
舊防敗走歸其營。　　舊、敗走して其の營に歸るを防ぐ。
繫書請問燕耆舊。　　書を繫けて請ひ問ふ燕の耆舊、
今日何須十萬兵。』　　今日何ぞ須ひむ十萬の兵。』

【字解】【一】漁陽　今直隷順天府の地方、安祿山の根據地。【二】突騎　突擊する騎兵。【三】赫赫　武德のかがやくさま。【四】雍王　寶應元年九月魯王适、改めて雍王に封ぜられ、十月天下兵馬元帥に任ぜられ、河北・朔方・及び諸道の行營を統ぶ、雍王は後に德宗となりし人。【五】都節制　一般にきりもりする權をにぎる。【六】猛將　賊軍の猛將なり、河北の薛嵩は四州を以て來り降り、張忠志は五州を以て來り降るの類。【七】翻然　態度をかへるさま。【八】後時　時期におくれる。【九】本朝　朝廷。【一〇】入　歸順すること。【一一】高計　上等のはかりごと。【一二】雄武城　安祿山反きしとき范陽の北に壘をきづき之を雄武城と號せり。【一三】防　防護の義。【一四】敗走　賊軍味方の敗走。【一五】繫書　てがみを箭につなぐ、戰國の時、魯仲連が箭文を燕の聊城に射こみて城を降らしめし故事を用ふ。【一六】請問　問の字必ずしも質問する義ならず、むしろ問告する義なるべし。【一七】燕　漁陽地方をさす。【一八】耆舊　父老たちをさす。【一九】十萬兵　官軍の方にてそれほどの多くの兵を擁して賊に向ふ。

【題意】雍王が元帥に任ぜられしことをききて漁陽の平げらるべきみこみあることをおもひて作れる詩。寶應元年冬晚梓州にての作なるべし。

【詩意】漁陽の突騎はまだ精銳ではあるが、官軍の方では赫赫たる雍王が元帥におなりになつて諸軍の節制を統べられることになつた。それで賊軍の猛將もこれまでの態度をさらりとかへて我がちに降參して時期に後れることを恐れ、朝廷へ歸順せねば上策でないとかんがへだした。』安祿山が北のかた雄武城を築いたときでさへ、それはもとその味方の兵が敗けて營中へもどるときの防護のためだつたのだ。まして祿山がゐなくなり、雍王が元帥になられた今日に於てをや。自分は箭文を以て燕の父老たちに對してつげるが、今日官軍はなんで十萬などの多衆の兵を擁して賊に對する必要があるもの

か。ただちに賊を降參させることになるでござらう。

花底

紫蕚扶千蘂。黄鬚照萬花。
忽疑行暮雨。何事入朝霞。
恐是潘安縣。堪留衛玠車。
深知好顏色。莫作委泥沙。

花底

紫蕚、千蘂を扶け、黄鬚、萬花を照らす。
忽ち疑ふ暮雨に行くかと、何事ぞ朝霞に入る。
恐らくは是れ潘安が縣ならむ、衛玠が車を留むるに堪へ「たり。
深く知る好顏色なるを、泥沙に委するを作す莫れ。

【字解】【一】花底　梅花のさけるした、これは次の「柳邊」の篇と近き時の作なるべく、「柳邊」の第一句に只道梅花發とあるによつて此篇の花の梅花なることを知る。【二】紫蕚　むらさきの「花のつけね」。【三】蘂　「くわずゐ」。【四】黄鬚　花房内の「しべ」の黄なるもの。【五】行暮雨　花の露にしめりたるさまをいへり。【六】入朝霞　花の日に映じてあざやかなるさまをいふ。行の字入の字は人にかかるなり。【七】潘安縣　晉の潘岳、字は安仁、河陽縣令となり、一縣に花をうう。【八】衛玠車　晉の衛玠、風神秀異、羊車に乘じて市に入るとき、見るもの以て玉人となし、爭うて果物をなげあたへたりといふ。【九】好顏色　花のいろつやのうつくしきをいふ。【一〇】委泥沙　散りおつるをいふ。

【題義】梅花のさきたるしたをとほりてよめり。代宗の廣德元年春梓州にての作。

【詩意】紫色の蕚が多くの花蘂をささへてたすけるかの樣であり、黄粉をもつた「しべ」が多くの花を照らさんばかりである。この花の木の間をとほるとうへから露がおちてくるので暮雨のふるときあるいてゐるのかと疑はれ、またそれがあざやかに日にうつろうてゐるあたりをとほると、なんで自分は朝霞のなかにはひりこんだのかとおもふ。こんな花のあるところをみるとここは潘安仁が治めてゐる縣ではあるまいか。またこんなうつくしい花ばかりあるところなら玉人だとほめそやされた衛玠の乘つてゐる車さへひきとめおいても十分につかはしからう。自分はこの花のいろつやのうつくしいことを深く知つてをる、どうかあたら花を泥や沙にうちちらさせたくはないものである。

柳邊

只道梅花發。那知柳亦新。
枝枝總到地。葉葉自開春。
紫燕時翻翼。黄鸝不露身。
漢南應老盡。霸上遠愁人。

柳邊

只道ふ梅花發くと、那ぞ知らむ柳も亦新なり。
枝枝總て地に到る、葉葉自ら春に開く。
紫燕時に翼を翻し、黄鸝身を露はさず。
漢南應に老い盡すなるべし、霸上遠く人を愁へしむ。

【字解】【一】柳邊　やなぎの木のほとりにてよめる詩なり。【二】只道　道ふとは「おもふ」ことなり。【三】到地　垂るるをいふ。【四】開春　春にあたりてひらくをいふ。【五】漢南　漢水の南、北周の庾信が枯樹賦に昔年楊柳、依依漢南とあるを用ふ、庾信は北にありて南をおもひしなり、作者は之を借りて鄕を思ふ意を寓せり、次の霸上の句と同意に使用す。【六】霸上　霸水のほと

り、長安の東に霸水あり、そのうへに霸橋あり、長安の人、東にゆくものあれば之を送りて霸橋に至り、柳を折りて贈りて別る、柳の多くある處なると且作者の故郷長安附近の事なれば之をいへり。

【題義】　柳のほとりにてよめり。前詩「花底」とおなじく代宗の廣德元年春の作なるべし。

【詩意】　梅の花がさいたとばかりおもつてゐたところ、いつのまにか柳もあたらしくのびた。枝といふ枝はみんな地面へたれさがり、葉といふ葉はひとりでに春の時節を逐うてひらく。時としては紫色の燕がそのちかくで翼をひるがへしてとび、黃鸝は葉かげにかくれてからだをあらはさぬ。この柳をみるにつけておもひだすが、滻水の南では柳は老いつくしたことだらうし、長安霸水のほとりのそれも今ごろはどんな樣子になつてをるやら遠く自分のうれひのたねになるのである。

聞官軍收（一）河南河北

官軍河南河北を收むと聞く

（二）劍外忽傳收薊北（三）　劍外忽ち傳ふ薊北を收むと、
初聞涕淚（四）滿衣裳　初めて聞きて涕淚、衣裳に滿つ。
（五）卻看妻子愁何在　卻つて妻子を看れば愁何にか在る、
（六）漫卷詩書喜欲狂　漫に詩書を卷いて喜んで狂せむと欲す。
（七）白首放歌須縱酒　白首放歌須らく酒を縱にすべし、
（八）青春作伴好還鄉（九）　青春、伴を作して好し鄉に還らむ。
卽從巴峽（一〇）穿巫峽（一一）　卽ち巴峽より巫峽を穿ち、
（一二）便下襄陽向洛陽　便ち襄陽に下りて洛陽に向はむ。

【原注】　余田園在東京。

【字解】　【一】收河南河北　寶應元冬十月、僕固懷恩等しばしば賊史朝義が兵を破り進みて東京（洛陽）に克つ、其の將薛嵩、相・衞等の州を以て降り、張志忠は恒・趙等の州を以て降る、次年（即ち廣德元年）春正月、朝義走りて廣陽に至りて自ら縊る。其の將田承嗣、莫州を以て降り、李懷仙、幽州を以て降る。これ河南・河北を收めし事實なり。【二】劍外　劍門の外、蜀をいふ。【三】薊北　薊州の北、今の直隸順天府地方、賊の根據地。【四】涕淚　感激のなみだ。【五】御看妻子　此語によればこの詩を作りしときは妻子此に在るなり、黃鶴の說に公は寶應元年秋に梓州より成都に歸りて家族を迎へて再び梓州に至り、十一月に射洪縣へ往けり、といへり。いつ妻子を迎へとりしやは詩にはみえず、此詩に於て妻子の語あり。【六】漫卷詩書　詩書とは詩經書經、「卷」とは當時の書物は卷きものなればなり、「漫に」とはうれしさのあまり、いいかげんに卷きおさめること。【七】白首　しらがあたま、老年なるをいふ、首を一に日に作る、白日ならばまひるなかをいふ。【八】青春作伴　青春は春の節をいふ、作伴とは妻子一家つれだつをいふ、「青春を伴と作して」とよます說あり、取らず。【九】鄉　洛陽をさしていへり。【一〇】巴峽　四川巴縣にある峽の名。【一一】巫峽　四川巫山縣にある峽の名。【一二】便下　下るの義明ならず、愚見地理上よりみれば「上りて」とあるべしとおもはるるも「下」とあり。强ていはば都にゆくを上ることとし他地にゆくを下るといひしか。ともかく襄陽へゆくことなり。

【題義】　官軍が河北・河南の地方を賊軍の手からとりこんだといふしらせを聞いてよんだ詩。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】　劍門のそとなる蜀に忽ち官軍が薊北までとつたことが傳へられた。自分ははじめて之をきい

たときはただ感激のなみだが衣裳にいつぱいになつた。一方妻子をみては平生の愁はどこへかとんでしまひ、讀みかけた詩書の巻きものもいいかげんにはふりだして狂ほしいまでにうれしくおもふ。このしらがあたまも、かつてに歌をうたうて、きままに酒をのむがいいし、時候のいい春のことでもあるから一家つれだつていざ故鄕にたちかへらう。すぐに巴峽から巫峽をとほりぬけ、それから襄陽をとほつて洛陽の方へ向ふことにしよう。

遠遊

賤子何人記。迷方著處家。
竹風連野色。江沫擁春沙。
種藥扶衰病。吟詩解嘆嗟。
似聞胡騎走。失喜問京華。

遠遊

賤子何人か記せむ、方に迷ひて著處に家とす。竹風に野色連なり、江沫、春沙を擁す。藥を種ゑて衰病を扶け、詩を吟じて嘆嗟を解く。聞くに似たり胡騎走ると、失喜して京華を問ふ。

【字解】【一】遠遊　故鄕をはなれ遠く他鄕に遊びつつあるときのことをのぶ。【二】賤子　わたくし、自己を謙遜していふ。【三】記　記憶する。【四】迷方　方向に迷ふ。【五】著處　俗語なり、到る處と同義。【六】家　以爲家 をいふ。【七】竹風　竹林上に風のふきわたること、此二字副詞として用ふ。【八】連野色　野色連と同じ、田野の色平らにうちつづくをいふ。【九】江沫　江水のあわだつをいふ。【一〇】擁　蓋し江汀に水波くだけてあわだち、あわだちの曲線が沙際をいだくがごとくなるをいふものなるべし。【一一】解　解き除くをいふ。【一二】似聞　「きくがごとくんば」の意、正確でなきことを示す。【一三】胡騎走　前年(寶應元年)に賊史朝義戰敗れて北、河を渡り、衛の兵をひきゐて來り戰ひ、又敗走す、これ「胡騎走」の事實なり。【一四】失喜　おぼえずあやまつてよろこぶ。【一五】問京華　京華は都をいふ、問ふとは都の樣子いかにと人に問ふなり、之を問ふは若し安穩ならば都へかへらんとおもふによる。

【題義】他鄕に遠遊する身にて賊軍の敗北をきき喜びのあまり作りたる詩。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】自分のことなどはいまはだれが記憶してゐるものがあらう、自分は方向に迷うて到る處そこを以て自分の家としてゐる。ここでは竹のこずゑに風の吹きわたるところ、遠く田野の色が連接し、江汀に沫起りて曲線を以て沙際を抱くがごとし。また自己は藥草をうゑて之を以て老衰と疾病とを扶け、詩を吟じて之によりてなげきを解き去つてゐる。このごろ聞くが如くんば胡騎はにげたといふことだ。それがためあまりに喜んで京華の樣子いかにと人にとひただしてみる。

春日梓州登樓二首

春日梓州にて樓に登る　二首

【一】

行路難如此。登樓望欲迷。

【一】

行路難きこと此の如し、登樓、望迷はむと欲す。

身無（三）却少壯。跡有（四）但（五）羇棲。　身は却つて少壯なること無く、跡は但羇棲なる有り。

（六）江水流城郭。春風入（七）鼓鼙。　江水、城郭に流れ、春風、鼓鼙に入る。

（八）雙雙新（九）燕子。依（一〇）舊已銜（一一）泥。　雙雙たる新燕子、舊に依つて已に泥を銜む。

【字解】【一】行路難　人生の途をゆくことのむづかしきこと、樂府に「行路難」と題する篇あり。【三】登樓　梓州の城樓にのぼる。【三】却少壯　あともどりして年わかく氣力さかんになる。【四】跡　行跡。【五】但羇栖　たびのすまひばかりしてゐる。【六】江水　涪江の流れ。【七】入鼓鼙　太鼓、こつづみの聲中にいりこむ、風が聲を吹くをいふ。【八】雙雙　雌雄ならびとぶさま。【九】新燕子　ことし來たつばめ。【一〇】依舊　もとのとほりに、巳引の黃鶴の說の如く寶應元年秋に妻子を梓州へ迎へおきたりとすれば舊とは寶應元年春をさすにあらず、漠然と往年をさしたるなり。【一一】銜泥　どろをくはへてきて巢をつくる。

【題義】春の日にあたり梓州に於てその城樓にのぼりて旅の思ひをのべたる詩。廣德元年春梓州にての作。

【詩意】自分の處世難はこれほどである。ここの樓にのぼつてあたりをながめるとどこをながめてよいのやら迷ひさうである。自分のからだはあともどりしてわかくきつくなることは無く、行ひのあとはとみればただたびずまひといふことばかりがある。みれば城郭の方には江の水が流れさり、春の風は兵亂のたいこ、つづみのおとを吹き送つてくる。さうして雌雄して飛ぶことし來た燕がまたもとどほりにはやくも泥をくはへて巢をつくりはじめてゐる。

〔二〕

〔二〕

（一）天（二）畔登樓眼。隨（三）春入（四）故園。　天畔、登樓の眼、春に隨つて故園に入る。

（五）戰場今始定。移（六）柳更（七）能存。　戰場今始めて定まる、移柳更に能く存せむや。

（八）厭蜀交遊冷。思（九）吳（一〇）勝事繁。　厭ふ蜀の交遊冷なるを、思ふ吳の勝事繁きを。

應須（一一）理舟楫。長嘯下（一二）荊門。　應に須らく舟楫を理めて、長嘯して荊門より下るべし。

【字解】【一】天畔　天涯の意、天のはて。【二】登樓眼　城樓にのぼつてながめる所の我が眼。【三】隨春　春は春色。【四】故園　洛陽をさす。【五】戰場今始定　是年の春、史朝義初めて滅し、洛陽は官軍に歸す。【六】移柳　うつしうゑたやなぎ、此二字は庾信の哀江南賦に、釣臺移柳、非玉關之可望とあるに本づく。【七】更能存　反語によむ。【八】蜀　成都、梓州、現在客寓の地。【九】吳　江蘇浙江地方、作者壯年時に遊歷せし地。【一〇】勝事　風景のよきこと。【一一】理　整備すること。【一二】荊門　山の名、湖北荊州府宜昌縣にあり、三峽を出で道を此山のある所に取りて東南に向ふなり。

【詩意】天のはてで樓にのぼつてながめる我が眼は、つい春景色とともどもなつかしき故鄕の方へとはひる。故鄕たる洛陽は今やつと賊がにげて平定したが、自分がかつてうつしうゑた柳はどうして生存してゐることができようぞ。自分は蜀の地が人の交際の冷淡なことをいとふ。之に反して吳の地方の風景のよいことの多いことをなつかしくおもふ。だからすべからく舟や楫を整備して、ながくうそぶきながら荊門山を經て江をくだるべきである。

有感五首

感有り　五首

〔一〕

(一)將帥蒙(二)恩澤。兵戈有(三)歳年。

(四)至今勞聖主。何以報皇天。

(五)白骨新交戰。(六)雲臺舊(七)拓邊。

(八)乘槎斷消息。無處覓張騫。

將帥、恩澤を蒙る、兵戈、歳年有り。

今に至つて聖主を勞せしむ、何を以てか皇天に報せむ。

白骨、新交戰、雲臺舊邊を拓く。

乘槎、消息斷ゆ、張騫を覓むるに處無し。

【字解】〔一〕將帥　諸方の將軍節度使等をいふ。〔二〕恩澤　天子のごおん。〔三〕有歳年　久しきにわたるをいふ。〔四〕皇天　てん、君に比す、君の恩をいふ。〔五〕白骨新交戰　新に交戰せるによりて戰死の者あり白骨となりたるをいふ、これ吐蕃との戰をさす。〔六〕雲臺　漢の時雲臺に功臣をゑがく、唐の太宗の時も亦然り、これ國初の功臣をさす。〔七〕拓邊　邊境の土地を開拓する。〔八〕乘槎　張騫　張騫は漢の武帝の時西域三十六國と交通を開きし人。此人が槎にのりて天の河に到りしといふ話あり。其事は宗懍の歳時記・東方朔内傳等の書に出づといへり、後世出でし話なれども文人往往之を用ふ。此詩は李之芳が事を指していふ、是の時、之芳和睦のために吐蕃に使し、年を經てひき留めらる、故に之を張騫が事をかりて喩となす。

【題義】感ずる所ありて作れる詩。蓋し廣德元年の作。

【詩意】將帥たちは天子の御恩澤を蒙つてをるが、兵亂は幾年かにわたつてつゞいてゐる。さうして今日に至るまで聖天子に御苦勞をかけたてまつてゐるが、こんなことで彼等はいかなることを以て天恩に報いることができるか。國家創立の當初には雲臺に畫かれた功臣たちは土地を開拓したものであるがいまは近く新らしい交戰があつて味方は死者の白骨となるものを多く出だしつゝある。また張騫にも比すべき使者(李之芳)が槎に乘つて遠くでかけたがさつぱりたよりがとだえ、どこに之をさがしもとむればよいのか、さがしどころも無い始末である。

〔二〕

(一)幽薊餘(二)蛇豕。乾坤尚(三)虎狼。

(四)諸侯春不(五)貢。(六)使者日相(七)望。

愼勿呑(八)青海。無勞(九)問(一〇)越裳。

(一一)大君先息戰。歸馬華山陽。

幽薊、蛇豕を餘す、乾坤尚虎狼あり。

諸侯春貢せず、使者日〻に相望む。

愼みて青海を呑むこと勿れ、越裳を問ふことを勞する無れ。

大君先づ戰を息め、馬を華山の陽に歸されむ。

【字解】〔一〕幽薊　幽州薊州、今直隸北部、祿山殘黨の根據地。〔二〕蛇豕　「左傳」に封豕長蛇の語あり、封豕は大なるぶた。他國を侵略する者をたとへていへり、ここは賊の降將等をいふ。〔三〕虎狼　吐蕃・羌夷をたとふ。〔四〕諸侯　節度使の戍るもの、即ち上の降將等をさす。〔五〕貢　朝廷へみつぎものをたてまつる。〔六〕使者　朝廷へ服從せぬ節度使に向つて歸順をさとしにゆくつかひのもの。〔七〕相望　前發のつかひについでまた後發のつかひが出るゆゑ、使者が前後相のぞむことになる。〔八〕青海　吐蕃の居る所の地方。〔九〕問　その歸服如何をとふ。〔一〇〕越裳　古代交阯の南にありし國の名、ここは南詔國(今の雲南地方に據れるもの)をさす、南詔は天寶以後唐に叛きて吐蕃につき屢〻邊土の患をなせり。〔一一〕大君先息戰歸馬華山陽　大君は天子をさす、息は

やめること、歸馬華山陽とは「尙書」武成篇に周の武王が天下を平定せし後のことをのべて「歸二馬於華山之陽一」といへるに本く。此二句の解釋種種あり、一に曰く、大君は玄宗をさす、今日の禍を玄宗時にさかのぼりていへるなり、大君先息レメテ戰、歸セシナランニハ二馬華山陽一の義なり、と。是にては上と接せず。二に曰く、大君は代宗をさし、代宗が兵を用ひざるを惜み、辭を婉曲にして之を譏れるなり、大君先息メテレ戰、歸シニ馬華山陽一の意なり、と。上に勿呑・無間と非戰の意をのべながら用兵せざるを惜むといふは矛盾なり。三に曰く、大君先息メレ戰、歸サムニ馬華山陽一とよみ、當時の事を外夷と稱ふるものを戒むるなりと、大君は時君（代宗）をさす。この第三の說宜しきかと考ふ、よりて之に從ひてとく。

【題義】此篇は武將兵を擁して割據し居ることの大害あるを歎息せり。

【詩意】幽薊の地方にはまだ封豕長蛇に比すべきわるい武將がをり、天地の間にはまだ虎狼のやうな夷狄がある。すなはち武將である諸侯どもは春にあたつて朝廷へ貢物をたてまつらず、朝廷から彼等に歸順をすすめにゆくお使が日日ひききりなしである。自分の考によれば靑海地方を併呑することなどは注意してせぬ樣にすべきであり、越裳（南詔）などいふ遠隔地のことなどは問ふにおよばぬことである。どうぞ大君におかせられてまつさきに戰爭といふことをおやめになつて周の武王みたいに馬を華山の南におかへしになりたいものである。

〔三〕

洛下(一)舟車(二)入。天中(三)貢賦(四)均。　洛下、舟車入る、天中、貢賦均し。

日(五)聞紅粟(六)腐。寒(七)待翠華(八)春。　日に聞く紅粟の腐するを、寒に翠華の春を待つと。

莫(九)レ取二金湯(一〇)固一。長令二宇宙(一一)新一。　金湯の固めに取ること莫れ、長く宇宙をして新ならしめむ。

不レ過(一二)レ行二儉德一。盜賊(一三)本王臣(一四)。　儉德を行ふに過ぎず、盜賊も本王臣なり。

【字解】【一】洛下　洛陽の地をいふ。【二】舟車入　「史記」に周の成王、召公をして洛邑を營ましめて曰く、此天下之中、四方入貢、道里均焉と。此篇起二句其意を用ふ、舟車入るとは四方の舟も車もここにいり來るをいふ。【三】天中　上文の天下之中の意、四方からみて中央なりといふこと。【四】貢賦均　貢は各地の土產をたてまつる、賦はわりつけたる租稅をだすこと、均とは上文の道里均焉の意、貢賦をもつてくるに里程が平均した場處にあるといふこと。【五】日聞　作者日日之をきく、聞の字下句までへかかる。【六】紅粟腐　穀物を多く倉にたくはへおくためにそれが腐る、紅粟はもみの米があかく變色すること。【七】寒　春寒なり。【八】翠華春　翠華は天子の旗なり。是の時洛陽へ遷都すべしとの議あり、人人天子の御旗の來りて春色の生ぜんことを待つ。【九】莫取　これより以下は作者の議論なり、そこに取る所の何ものもない、そんなことにいりようはない、の意。【一〇】金湯固　金湯は金城湯池の畧、金鐵できづいた城、熱水をためた濠池の義、固は堅固なること、普通ならばかかる防禦物は必要であるが天子の都にはそんなものはいらぬ。【一一】宇宙新　政治を一變して天下ぢうをあらたにする。【一二】行儉德　儉約といふ德をおこなふ、是の時代宗漸く奢侈ならんとする風あり、因て儉を說く。【一三】盜賊　人民より誅求する武將等をさす。【一四】王臣　天子のけらい。

【題義】此詩は遷都の議をきき政治一新の根本論を說く。仇氏は遷都の非を歎じたる詩なりととけるも、余は之に贊せず、むしろ遷都の是非云云を超越して君德をときたるものと考ふ。

【詩意】洛陽には四方から舟車がいりこむ、さうして其の地は天下の中央で四方から貢賦をはこぶに

は里程が平均した處だ。そこには穀あまりてくさり、人人寒時にあたり天子の遷幸の旗きたつて春の生せんことを待ちつつあると聞く。或る人は天子の都としては金湯の固めがいる、洛陽は金湯の固めをかいてゐるではないかといふが、自分の考では都に金湯の固めなんどいふものは取りえのないものだ、それよりもどうか天子がいままでのやりかたをかへ、この天下を永久に新にされんことを希望するのだ。天下を新にするといふたところで格別むづかしい方法によるわけではない、ただ天子が躬ら儉約の德を行はれるだけのことだ。いま盜賊行爲をしてをる武將どもも、もとはみな天子のごけらいなのである。

〔四〕

(一)丹桂風霜急。(二)青梧日夜凋。
由來(三)强幹地。未ㇾ有ㇾ不ㇾ臣ㇾ(四)朝。
(五)授鉞親賢往。(六)卑宮制詔遙。
終依ㇾ(七)古封建ㇾ。豈獨聽ㇾ(八)簫韶ㇾ。

〔四〕

丹桂、風霜急に、青梧、日庭凋む。由來、强幹の地、未だ臣とし朝せざるは有らず。授鉞、新賢往けり、卑宮、制詔遙かなり。終に古の封建に依らむ、豈獨り簫韶を聽くのみならむや。

【字解】〔一〕丹桂　「きんもくせい」のこと、唐の王室をたとへいふ、漢の成帝の時の童謠に桂樹華不ㇾ實の語あり、桂の花は赤色にして漢家の象なりといへり。〔二〕青梧　「あをぎり」唐の宗藩（親王家）にたとふ、「きり」の木は本幹より子枝孫枝がよくそだつ、由て王室の御親類すぢの象とす。丹桂・青梧の二句節物をのべ同時にたとへをとる。〔三〕强幹地　强幹はつよいみきなり、幹は王室なり、子孫の枝が王室を護れば、王室の幹はつよくなる、强幹地とは「つよいみきのあるところに於ては」の意。〔四〕臣朝　臣下となりてきまりどほりに朝廷へ參勤すること、唐の藩鎭の武將どもは往往天子に對し臣下たる禮節をつくさず。〔五〕授鉞親賢往　鉞を授くるとは兵馬の權を委任するをいふ、親賢とは天子の近親にして且賢なるをいふ、此句は寶應元年に代宗位に卽き雍王适を以て元帥とせしことをさす。〔六〕卑宮制詔遙　卑宮は天子が宮室を卑くし、みすぼらしき建物にすまはるること、儉約のさまなり、制詔はみことのりなり、代宗に卑宮の詔ありしや否や不明なるも此詩句によれば之ありしものとみるべきなり、（仇氏は授鉞二句について玄宗の時の事を引きて解きたるも恐くは是に非す）遙とは作者遠方にありて之をきくをいふ。〔七〕古封建　周の仕方をさす。周は天子のこどもを諸國に封じて建て置きたり、それに由つて王室を護らしめんとせるなり。〔八〕聽簫韶　韶は舜の音樂の名、簫がおもなる樂器なるにより之を簫韶といふ、此句は諷意あるならん、蓋し干戚を舞はして三苗を服從せしめしの手段を非とするものにあらざるか。

【題義】此篇は宗室を封じて王室を護らしむべきことを說けり。

【詩意】丹桂のうへには風霜がしきりに置き、青梧もまた日となく夜となくしぼむ。王室宗室ともにふるはなくなりつつある。元來もし樹の本幹が强いならばそこに向つてはいかなる不心得ものも臣節をいたし參朝せぬものはないはずであるのだ。このごろわが天子におかせられては鉞を授けて親賢のお方（雍王适）を敵前へおつかはしになり、また吾吾は遙に卑宮の詔をうけたまはつた。まことに結構なことである。結局は今の世も古代の封建の趣旨に依るべきものである。ただ深宮に在つて簫韶の音樂をきいてをるといふことが目的ではあるまい。

〔五〕

〔五〕

胡滅人還亂。兵殘將自疑。　胡滅して人還亂れ、兵殘りて將自ら疑ふ。
登壇名絕假。報主爾何遲。　登壇、名、假を絕つ、主に報ずる爾何ぞ遲き。
領郡輒無色。之官皆有詞。　郡を領すれば輒ち色無く、官に之く皆詞有り。
願聞哀痛詔。端拱問瘡痍。　願くは聞かむ哀痛の詔、端拱、瘡痍を問ふを。

【字解】【一】胡　賊軍。【二】人　人民。【三】兵殘　兵の少數がのこるなり。【四】將自疑　將は賊の降將、自疑とは自ら信ぜざるなり、もと賊に從ひ居て新しく降りしものなればいつ官から罰せらるるかとあやぶみて疑ふなり、自ら疑ふによりて又た兵をつのりて自己を守ることになる。【五】登壇　漢の高祖、韓信を大將に任命するとき特別に壇をきづきそのうへに信を登らせたり、ここはただ武將を任命することをいふ。【六】名絕假　韓信齊の地を定めしとき假りに王とならんと請ふ、高祖、「大丈夫諸侯を定むるには卽ち眞王とならんのみ、何ぞ假を以て爲さん」といひて齊王を授けたり。いまその如く名には假なるものなく武將みな眞王となるといふなり、ただし唐の時王の稱はなし、武將は爵と土地と名實ともに之を受けしことをさす。【七】主　天子。【八】爾　武將をさす。【九】領郡　郡を支配する。唐にては郡なし、州の刺史に任ぜらるることを領郡といへり。【一〇】輒　すなはち、いつでもの義。【一一】無色　顏色うかばぬをいふ。【一二】之官　官に之く、とは州へ赴任するなり。【一三】有詞　詞は怨言なり。【一四】哀痛詔　天子自らいたみ過ちを悔ゆる意をのべたまへるみことのり。【一五】端拱　端坐して手を拱く、容儀をただすさま。【一六】瘡痍　きずあと、民のなんぎをいふ。

【題義】此篇は當時武將を重んじて郡守（州の刺史）を輕んせるを慨する意をのべたり。

【詩意】胡賊は滅亡したにかかはらず人民はなほみだれたつておちつかぬ。兵は減少して殘りすくなになつたが武將は却つて自己の安否を疑ひつつある。苟くも將に任ぜられ壇にのぼるものはみな眞王の如く名稱實利をならびうけてをる。それになんで汝等は天子に報いたてまつることがおそいのであるか。武將はこんなであるに、他面、行政の官はといふと、郡を領し州の長官に任ぜらるればいつもその人は顏色がうかばぬ。さうして赴任するにあたつては皆ぶつぶつ怨みのことばをだす。こんなことではならぬ。自分はどうかして天子が悔過の哀痛の詔をおだしになり、端然容儀を正しうして人民の艱苦をお問になることを希望するのである。

春日戲題惱郝使君兄

春日戲に題して郝使君兄を惱ます

使君意氣凌青霄。　使君の意氣、青霄を凌ぐ、
憶昨歡娛常見招。　憶ふ昨、歡娛常に招かれしを。
細馬時鳴金騕褭。　細馬時に鳴く金騕褭、
佳人屢出董嬌饒。　佳人屢〻出づ董嬌饒。
東流江水西飛燕。　東に流るるは江水、西に飛ぶは燕、
可惜春光不相見。　惜しむべし春光に相見ず。

【字解】【一】惱　なやます、こまらす。【二】郝使君　郝使君は某州の刺史にて通泉に居りしものならん。或は旣に退居せしものか。【三】兄　年長者に對する敬稱。【四】青霄　あをぞら。【五】憶昨　昨とは去年冬通泉にゆきし時をさす。【六】細馬　良馬。【七】鳴　馬がなく。【八】金騕褭　卽ち細馬と同物、褭

裏は赤喙黑身の駿馬、金とは金なかざれるをいふか。【九】董嬌饒　漢末の美女の名、うへの佳人と同物。【一〇】東流江水　水の流るる如く時はすぎ去る。【一一】西飛燕　春すぐれば燕飛び來る。【一二】春光　はるげしきのあるときにの意。【一三】不相見　郝と面會せぬこと。【一四】王趙兩紅顏　二人の美妓。

願攜王趙(一四)兩紅顏。　願はくは王趙の兩紅顏を攜へて、
再騁(一五)肌膚(一六)如素練。』　再び騁せよ、肌膚、素練の如し。』
通泉百里近梓州。　通泉は百里、梓州に近し、
請公(一七)一來開我愁。　請ふ公一たび來りて我が愁を開け。
舞處重看花滿(一八)面。　舞處重ねて看む花面に滿つるを、
樽前還有錦纏頭。』　樽前還錦纏頭有り。』

【一五】再騁肌膚如素練　此七字一句なるも再騁の二字は上句に屬せしめてみるべし、郝に向ていふなり、杜詩の無理なる句法の一例とすべし。【一六】肌膚如素練　の五字は兩紅顏の補足的説明なり、素練はしろきねりぎぬ。騁の字を此句に屬せしめ「逞しくせしめよ」の義なりととくものあれど依りがたし。【一七】公　郝をさす。【一八】花滿面　前に笑時花近眼、舞罷錦纏頭の句あり、余さきに花は花枝かとのべおきたり。ここの花も同義かとおもふ、一說に花は顏面の裝飾に用ふるものなりといへり。

【題義】春の日に戲れにかきつけて郝使君をこまらせた詩。廣德元年春梓州にての作。

【詩意】使君の意氣はあをぞらをしのぐばかりだ、通泉でおもしろいたのしみをしたときいつもお招きにあづかつたことはいまもおもひだす。あのときは金騕褭の細馬が時時いななき、董嬌饒に比すべき佳人がときどきあらはれでた。』水は東にながれる燕は西に飛ぶ。惜しくも春げしきは過ぎやすいのだが、その春げしきのをりからあなたとは面會せずにゐる。どうか王・趙・の二美人をたづさへてふたたび馬をとばせておいでなさい、彼女等美人はその肌膚はしろいねりぎぬのごとくうつくしいものどもである。』あなたの居る通泉はたつた百里でわたしの居る梓州には近い。どうぞ一ど來てわたしの愁をはらしていただきたい。彼女等の舞ふ處、かさねて花の面に滿つるを看ませう。また酒樽の前には錦の纏頭もござる。

309
65

終